小紙の俳諧ハ
三尾屋四方吉
物語の行方
四方の意物語
句をとりて新
所ゝ抜句解ハ
ゝ言から
田屋の上新よ

[illegible]

大めてこれをこのつ稲中汁[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

和漢図書の事ならば

橘東洲梅人

寛政戊午初冬

蔡全

蔡全

序

北総油田村山奴東武青山小

蔡全

未亡云案乃友し遊ふと久し

事於八古弱の土産なもし一集を

編ミ京華書肆に彫ひて作れに

きやと記ることあるく今年

小冊ありぬ名付け年毎田毎の日
とハふ春日影数かやこのん
こと栽移うふ

三世太白堂 桃隣

春之部

正月

大皞帝 勾芒神 蒼天 東君 青陽 韶光
大簇律 立春節 雨水中 孟春 初陽 陬月
端月 睦月 祝月 太郎月 初空月

元日

元日ハ田毎の日こそ恋しけれ はせを

元朝 三朝 元三 三始 元旦 正旦 鷄旦
改旦 新春 年頭 年始 淑氣 復新 新年
前年 改年 聖節 履端

四方ノ春

八聲めくる空ハかきりし四方の春 亞 桃隣

千代ノ春 君ヶ春 御代の春 花の春 宿の春

立春 今朝の春 年立かへる 新玉年 去年今年

初空

初空やよろき迎ふ吹く松の風 亞 桃隣

初雞　初雞や　都のうへは室町風　桃花
四方拜　屬星祭　當年皇の九曜是を歳初に滑稽雜談に委し
星佛　くかくのごとくかちらかしつゝ喜ぶ　桃処
齒固　白散　度嶂散
御藥を供　屠蘇の香に初るゝ花のゆえ　紀及　桃花
屠蘇　撥柏酒　撥觴　これも元日に用ゆる事文類聚にあり
撥柏酒　山椒の酒なり
朝賀　朝拜　奏賀　奏瑞　小朝拜　朝賀これを紀に載せたり
元日辰の刻に天皇大極殿に行幸ありて行はるゝ公事根源に委し
元日節會　諸司奏　公事根源に委し
七曜御暦　これは日月火水木金土の七曜を表したるものなり暦なり

氷ノ樣　去年氷室に納むる氷の厚薄を奏
腹赤　鱒といふ魚をとりて筑紫より奉りて音に節會に供ずるなり
國栖奏　吉野に行幸の時国栖人集りて一夜酒を奏り哥をうたひ其後
笛　来朝にまた其ことをうたひとうや
院拜礼　一日院衆の人々院御所にて拜礼のあるを捨芥抄に委し
祇園別當神事　元朝寅の一天に行之
年德神　年々〳〵や新〳〵に導の年のはや　桃賀
昆沙門羅德經　昔は元朝寅の時に訓讀せしに雜談抄に委し
若庚　世は業や　繁とのはもゝ若ひも　山蜂
庚廻　大黒舞　民家の門〳〵をうたひ舞て嘉祝を
春駒　奏治の順にそなるめく山奏　この彩　十調
鳥追　多追やそ〳〵かしこまりて笠いうち　石二

傀儡師　鬼を出す　新佛あり　傀儡師　鳥花
猿曳　猿引きの肩衣よりおろし　武禮　一士
門神棚　多は素る　狩明　名門や　神の棚　桃尼
門松　月雪のあらめも　ちらし門　松　太素
豆松　飾松竹　縄藁　炭　海老　掛鯛
注連飾　水き根　今朝やうらん　師業　柳門
橙　橙の数や　旭て　注連は　霜　里雀
若水　若水よ　芽松　汲込む　住居うれ　三世桃隣
包丁開　井花水　若水桶
若餅　ちらしやう　礼若は　酒桟俵　知道
雑煮　ひつ蓬　つ夷めうちる　雑煮うれ　雨光
蓬莱　蓬莱や　中も白き　米の冬　石二

喰積　押鮎　うもの子　野老ホ祝の品畧
花煎賣　金くのこ　やうぜの　夷　木志
双六賣　若やき　刃六　うりや　霜の鮒　桃翠
年男　松るし　川馬　はるる　年男　鈎雪
庭竈　竈　ゆ　民や　庭かま　七枝
福藁舗
福湯福鍋
大ふく
餅打うり
粥子
破魔弓　ばきてふと　祝　胡鬼の子　是資夏蚊を食ふ呪と云
丈
ちらし　の飾りや　行の切　桃屋

福引宝引
弓始
馬騎始
藏開
湯殿始
飛馬始
着衣始
船乗初
舟玉祭
事水
[illegible]
三物連哥

昔福引とて餅を二人にて引合て信とし楽談抄に云
西垂をくのつゝみや弓さゝめ　宗瑞
のり初よ残りを杯に馬場の雪　鮭之
穀初の初荷忘りの義初き　酒好
梅の香も春〳〵初湯の風に付て　笛口
梁塵抄に正月始て馬場殿において馬に騎て飛馬始と云或曰秘説
きゝそ〳〵の御堂の前の花表梅てえん　如泉
のり初の初頃若〳〵汐さゝひ　みつ
住吉の社社側に舟玉神とて有り
門松に根に立る木あり
門松に結び付て供物を此内へ入るゝ
同俳諧　裏白連哥　同俳諧　歳且開

初夢
初暦書開
筆初
試筆　吉書　書初　吹初　舞初　松ハヤシ
謡初
千寿万歳
初賣　初商　買初　初店飾　帳用
節振舞　朝節　夕節　節小袖　松内　初芝居
[illegible]
水祝

神変や　笑ひて美る神の梅　静江
化粧して母の〳〵雪の花　雁戸
海山の美や墨絵のくまぬ　石二
松風を笑ふ夜もなり涼初　桃五
まん茅やこゝも若き光の春　一士
元日よ降雨をうゝ
いとはもや春まよか〳〵射まゝ　春動
正月の麻紀をうゝ
そう真寿よ水を祝ふ事なり

けさ〳〵女貴　元日赤き袴を〳〵紙符をうる祈嫁聚

桃符　桃板　桃梗　仙木　神荼　鬱壘

唐土神荼鬱壘二神の形を画て元日門に張凶鬼を防

畫雞貼戸葦索唐ゆて雞を画て門戸の上に置葦縄をもて百鬼を防く

如願　唐ゆて如願と云女糞壞中に入れをきるを見ては之令如願と云なり

葭灰飛ス　立春の日はいの灰を出て夾の室に至て自然と飛

春盤　立夏の日春の餅菓を相送るを夾盤と云

春燕を裁　緑燕　唐ゆ〳〵燕を作り彩て立夏の日にて〳〵なり

初子の日　雀鳴〳〵やてみけ日　初子の日松　風馬

初子けけ　小松引　子の日松　初子の日の玉箒

初寅祭　上の寅日鞍馬に参る

春卸　多いしまる編川人や春卸　桃曉

初卯　上卯の日任吉に春卸る事なり

卯杖　上の卯日色々けあを切結ちるを卯杖と云公事根源に委

愛宕寺天狗会　二日の夜つるめてあと集り高安して後寺の門戸を扣くこと

二宮大饗　二日公卿以下参りて拜礼後饗宴はなはだ多

朝覲行幸　二日天子は年始に上皇母后の宮に行幸あること

臨時客　二日摂政関白家小初春大臣以下上達部を招て饗宴あり

屠新之慶　元日に賀せる詞あり

たゝ〳〵　延喜式に日〳〵瘡万病膏〳〵之

叙位　五日或六日諸臣の年勞を奏し位を次第に叙せらること

人〻帳に貼を　七日唐ゆて人を画門戸に貼を

七種　七種けけ　の　なやを乃皆　桃翁

若菜　一下雪こと〳〵　けけ　の若菜　宗端

齋

磯菜摘

おさきき摘

人日　鹽辰

白馬節會

菜摘川神事

其面富

御齋會

眞言院御修法

太元師法

女叙位

女王祿を給

霜降き　夜明の舞　桃雨

多好の引き　道きくひきり　破菜　摘　桃　一

うくきき云ひ　夷の所よる　摘　の人　ものよ

七日正月

七日あをるはもち　市子は　公事根源に奏

七日吉野勝手の明神より

七日夜摂氏其面山ゆて富筒をはく

大極殿ゆて八日より十四日まて最勝王經を講せらる

八日より十四日まて行之　宿直人はかり仲よ

八日治部省ゆて七日行之

八日女の位階を叙せらるゆて　公事根源に奏

八日女王祿をうゆ次第よりし

常陸帶神事　常陸國甕島神社ゆて十日男女の帶へ名を書て神前に置て　稱宜

是を結ふ

居竈夷祭　西の宮ゆて行へり　居竈へ九日　夷祭へ十日

縣召の除目　十日より十三日まて外國の人を召て任官を授け諸國の受領に任らる

御齋會民論儀　十四日由祭玄の結願にて南殿ゆて行之

外記政始　是は吉日を撰て行へ　先九日ある人き前

男踏歌　踏歌八十四日　女踏歌十六日　公事根源

三毬打　左義長　爆竹　吉書揚　菱葩

左義長に真言院にて行る毬打を神泉苑に出て焼

ゆくをゆよ一つ仲よくり

大經を引合て勝負に吉凶を知る

十五日の事あり

細曳

上元

御薪
粥木粥杖
小豆粥祝
平岡御粥
獅子頭神事
土竜打
賭弓
厄神参　疫民將來
吉田清稜
女節分
昊足鏡割
二十日團子

十五日百官悉く菊を持て宮内省に納らるゝ　かや
枕叩子に十五日が西の方にて打事いとはしく挾衣に粥杖とあり
十五日是を煮て天狗を追れば年中の邪氣を除くゝ　三條宗　十五日　駿州
十五日河内国平岡の神前あり
十六日伊勢山田にあり
幾内少て十四日小此事あり
十八日天子弓場にて弓を張給ふ
十九日は夜あり　初不動　初天神
十九日ゝ吉田の厄神詣あり
洛中にて御代や昊天の燒　哥流
廿日京師の俗家毎に粥を食ふ　古正月とぞ

煎餅繫
伊都岐嶋祭
丹宮
御忌
福壽草
東風
淡雪殘雪
雪解
氷解
凍解
雨水之節
木芽

廿日ゝ江東俗紅の糸にて繫家の上に置事あり
下戌日官幣有近代斷絶とぞ
廿日信壽殿にて行る文人題をあり詩を作るとかや
廿五日法然上人の忌日にて十九日ゝ七日の間知恩院に法要あり
彼岸の初ゝ　福壽草　土情
朱風やゝ　墨の窓　朝虹
紀ゆる麦の芽ゝ　麦は雪　木水
雪解や　三河　左來
解ゆゝ　小田の小　この南　眠鳥
凍ゝ　小鹽の　逝の彩　桃花
昊氷なのる
ゝ　瀬昊を祭
ゝ　ゝ　ゝ　

下萌　下もえや大根いけるる穴の中　雁戸
若芝　若芝や掃ふ〳〵もきまる庭　可笑
鶯菜　梅ゝ枝よ流〳〵遠ゝ鶯菜　菜圓
荇　荇摘や門田ようつる三ヶの月　桃嚴
若艸　若艸の数や嬉毋〳〵そ作〳〵る　女楚室
芥子菜葉　芥子菜葉　淇園
蕗薹　山陰やいつの〳〵長き蕗のとう　凡秀
松の花　十かゝり枝よりや人とゝん松の花　里時雨
土筆　ほこ〳〵と摘やつくしつまやつくし　其角
畑打　畑うちや土彩のそゝる数境　下総国山奴
畑ぬくと　畑かへと　種物　山椒皮　雑菜摘
若緑　淺や松も柳も みどり　春水

餘寒　布晒〳〵水の煙り村雨寒し　桃祇
嵩春樂　春鶯囀　梅枝うぐひす　青柳うぐひす　芹うぐひす
子日衣　梅花衣　鶯衣　鶯袖　柳衣
山笑　くゝきさ揚を多ひ出〳〵さり山　樵　乙由
鳴鳥狩　泊り山　朝鷹
泊り山ハ野山ヨ出て霄ヨ雉の鳴所ヲ聞置明前ヨ行鷹ヨ雉ヲ取ヲ泊り中ヲ鳴鳥狩ヲ朝鷹ヲ云ふ
鷹ヲ掛ル鈴ヨ鈴子ヲ付ル也ヲ鳴ヲ鷹ヲ鷹ヲ
狩ヨ行ル鳥ヲ驚ヲ〳〵の義也
鈴とゝん
鷹の尾ヨ雀の羽ヲつぐ式ヲ
繩尾　踊こ〳〵おりひろめてや　猫は鼠　蓼太
猫妻戀　松明消〳〵舟臘ゆり　白魚　可笑
白魚

佐保姫
初霞
霞
長閑
水ぬるむ
雉
鳥囀
百千鳥
鶯
うぐひす　鶯鶯
駒鳥
雲雀

佐保山の霞は色に寄て春を深き神とよ　二世　桃雨
明て天に引入田ありとうたふ　佐氏　桃蹲
のどかさや比良の嶽ありなきこと　里川
うぐひすや紙衣干る尼の前　古　桃雨
湖風に帯ハ長し小川の蜆やけり　多代
数あり一船の鶴の声　桃雨
八雲御抄曰鶯に限らず千鳥の囀と云鶯を詠る例なり　一歩
鶯の濡へ舞んてさんさをれ　二世　桃隣
ゆるゆるや住馴ぬる鴨の巣　桃蹊
夫風に力なくなる初雲雀　野水

永日
梅
柳
椿
玉椿
春雨
苣
三葉芹
猫洛
防風
烏芋
山葵

永き日や蓬やさしきなる達　桃五
梅一ぱん一ぱんの匂ひうき　嵐雪
落潮の柳ゆるしたるの郡　燕尾
木の下に花ゆるしたる式　桃條
八重代は玉椿なる
夫婦や障の巣はくふ蓬根の漏　白麻
苣畑やうぶ梅に茶売の移所　丸脱
砂川や蓬の餅に濡し三つ葉芹　濱石
玄竜子ゆるすやーうと　さらり
防風や舟に塵おき砂地に　泉貝
舟尺濡に六ッ七ッ強くなる　吳仙
手に水に濡ぬ花や山葵取

蝦菜　摘残セ蝦菜の秋も浅くなる　三習
鱒鱈　鮒膾　初鮒　吉饅　干鱈　目刺　飯鮒
浅蜊　蜆　す蛤　海雲　若和布　ひじき
海苔　妻初もり海苔　若源くゝ　玄の日向式　二世　桃雨
春風　玄風やく　まふやき　秋の波　千心
風光子　麦ふれ　ハタ日ふ風のひろ　桃雪
木地炉縁　小屏風の墨絵　入り　赤地炉縁　燕尾
春の宮　東宮あり　備君の由ナあり
霞の洞　貞徳云仙境とふあり　院の御所とも

二月

献生子　夾鐘　律　驚蟄　節　春分　仲春　陽中　如月
初午　令月　きさらぎ　梅見月　小艸生月　初花月
水間参　唐ニテ二月朔日吉き袋ニ百穀瓜李子の菓種を入て送と云
東福寺懺法　うゝ年や　賽銭ふみハ堂ニ居ふ　其角
本妙寺詣　泉涌あり初午の日群集を土産ニ草蘚を得る
摩耶参　六時ニ六根の罪を懺悔する法あり
吉野の餅配り　近江あり初午の日詣も
行基参　摂津初午ニ近国の人専ら飼馬の無難を祈りて馬を曳て参
二日灸　一日諸人配りのふ
二日摂津河辺郡昆陽村昆陽寺ハ行基の開基あり
紀事曰三月二日男女各灸をすと二日ヤイトふ

釈奠

二月堂の行

春日祭

薪能

大原野祭

園并韓神祭

祈年祭

祇園御八講

遺教経

涅槃会

佛のまつり

上丁の日大學寮にて孔子の十哲の影を祭る事し二月八月
両度なりとて釈奠とゝいふ事あり
南都東大寺にて一日より十四日迄行ふ七日十四日両夜牛玉を貼する水を取
上申日大中納言の中無穢人上卿にして前夜京を出て南都に越く
七日より南都興福寺の南大門に薪能始る十四日にて
八幡事根源に曰春日本社遠きゆへにて都近き所に移しまつる有春日祭同
延喜式に園神一座韓神一座と有是あり今荒神と云
四日太神宮以下三千百三十二座の神を祭りまつる豊年を祈りまつると云
拾芥抄に今絶へて沙汰なしとあり
徒然草に千本の釈迦念佛と云是ありとあり
涅槃会 今や 後宴を精舎と云る幻化 遠及 桃園
二月のまつり 仏 雪のまつり

常樂會

嵯峨の柱炬

餅花煎

積塔

貝寄

踊念佛

圓宗寺最勝會

聖靈會

浅間祭

北野御忌日

地良の八講

道明寺祭

十五日南都興福寺よりなり
十五日清涼寺釈迦堂の前に大明松両基建
京師或は幾内の俗涅槃會に煎りて供物とす
十六日盲人撿校以下清涼菴に集て修す
廿日前後難波の浦に寄貝を拾ひ雑談抄に委
彼岸の中日に摂津四天王寺にて此事なり
十九日より五ヶ日延久五年に始まるとなり
廿二日聖徳太子の御忌日にて天王寺に法事あり終日伶人の舞なり
駿河浅間祭廿日
天満天神の御忌日なり吉祥院にて八講あり廿五日
近江国地良山にて行之
廿日河内国雑談抄曰奥の天神とゝ

季〻御讀經　八事根源日三月八月ゟ大般若經を百部ゟて講ぜらる

時宗踊念佛　五條の西御影堂ゟ二季の江戸岸ゟ踊躍ゟ

社日　立春の後第五の戊の日ゟ是唐ゟて五穀の神を祭ゟ日ゟ

社翁雨　社の神奪目水を食ぜらるゟ人社日ゟ必ず雨ゟ是ゟ

治聾酒　海録碎事ニ社日ゟ酒を飲ハ耳遠きを治ぜらるゟ

彼岸時正　彼岸ゟ入れ世ゟて澤の声　花曇り　桃玉

苗代　苗代ゟ引てゟ　濁き　家上川　桃隣

苗代菜萸　苗代へ蒔る菜萸ゟ田のむらへ　大夢

水口祭　本朝食鑑曰農民苗代水を引口を祭ゟ

種井　種ゟ

藍蒔　藍ゟ蒔ゟ　種ゟ

麻蒔　麻ゟ蒔ゟ　水地の外ゟ長　靜江

（麻ゟ蒔ゟ　ゟ青ゟ長ゟ　春蝶

厳　ゟ日ゟ日ゟの日和ゟ　張賀

狗背　ちんまいのゟ延ゟる古根の南　桃條

蒲公　たんぽゟ花さゟ　桃一

枚菜　ゟんぼゟ葉の広ゟ枚菜ゟ　有志

枸杞　くこゟ　孤雄

五加木　ゟむゟ　其毛

虎杖　摘ゟ　桃雪

韮　ゟ垣根のゟ　雁呂

蒜　ゟ一ゟ延ゟ雨　山白

胡葱　葉の緑ゟ一株ゟ芽出ゟ　擬子

野蒜　軒口ゟ　桃雨

水葱摘　ゟ根ゟ　ゟ細ゟ　ゟ生ゟ春摘ゟ

八重垣ゟ白沢田ゟ

蕪の花　桃舎
菜は花　言水
大根の花　下総国山　奴
髪艸
草は若葉　桃祇
野山焼　其毛
末黒薄
荻の焼原
角組芦　桃三
草かるびき　挑翁
蓬摘　雨夕
接骨木花　春蝶

又そくの門よ咲る面影なこの花
尼寺よ唯菜の花はちる　徑
まきりつゝ畑の囲こりや花大根
本名末祥春女兒是髪を結ひてはなを簪なかるゝ叫ぶ名なり
夏のくるやつゝ初ゝぬ艸の花一番ゝ
山やく　や何ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
袖中抄ゝ白ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
雑談抄曰初生黒き芽ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ま〳〵寒〳〵きかり孫の頼や芦の角
土ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

顔鳥　連哥新式ニハ翡翠ニ[illegible]

[illegible]鳥　景鳥　或説曰[illegible]

帰雁　子のくやも　種蒔いあ[illegible]ふる　青露

引雀　引鴉　天子御狩の雀を百官ニ給ふと云又鳴声を云又引て帰とも云又

春ハ帰雁とおもふと置ハ其友ニ引て帰らぬと云説なり

松むしり鳥　菓ものゝ類ものゝ小鳥なるよ

雀の子　折まて花あ[illegible]ひりり　岩ほ子　呂仙

孕鹿　[illegible]みの[illegible]の[illegible]の[illegible]の家　司山

鹿の角落　[illegible]の扇　拾ふ[illegible]　比むし　蜷　[illegible]日の月秋ふる　百川

蜂とのけ　蜂の巣　寄居虫

蜂の巣　蜂の巣を放まぬ影や雨京　喜久

蜜　菜曽はきまるや　枯ものよ紀　一ッ　桃霞

蚯蚓と出る　蚯蚓と出る[illegible]の日紀ふ[illegible]　有隣

蝶　[illegible]　[illegible]　桃五

田螺　濁り江ニ浮上りもる田ホ[illegible]式　桃種

馬刀　[illegible]　鮡子取

蛙　声[illegible]ふり浮[illegible]の中ほ蛙ふ[illegible]　羅仙

八巾　人[illegible]ぬ袖ニ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]浦ほ[illegible]　三世桃隣

蒸鰈　今踏[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]　其毛

初雷　月令　仲春の月雷声[illegible]始て電を

蔦ノ若葉　菊ノ若葉　萩ノ若葉

出代　出代や[illegible]ふる[illegible]ふ[illegible]の三[illegible]ふ[illegible]　二世桃雨

陽炎　[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]の上　桃三

糸桜　[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

朧月　山の端ゝ雁一声や初月　立耽

三月

姑洗律　清明節　穀雨中　季春　竹秋　弥生

桐月　禊月　櫻月　花見月　春惜月

二日　摂只四天王寺よりはじまり

清明の節は前二日を云　増山井に委し

これも寒食の後ゝもあるし

寒食に用ひ〻事鄴中記にあり

金門歳節白寒食装萬花輿煮桃花粥

日本記に上の巳辛後苑曲水の宴はじまり　宋書に三日を用ひて

巳の日を不用となり

三日と云あり

経供養

寒食

榆柳の火

杏粥東粥

青精飯青飯

桃花粥

上巳

重三

元巳上除
巳日祓
須磨御祓
桃花節
桃ノ酒
白酒
草餅
雞合
雛
踏青
油花ハ
曲水

暮春の祓元巳の時なるべし戊巳也
周の世より起り魏の世より三日と用ひ水辺にて祓
これハ源氏須磨へ左迂の時祓しまつる物語なり
三日より桃花を酒に浸して飲へ百病を除
畫の絵も描くなり　けさ　山　下総油田　奴
おさめる白雪　山の京　三世　桃雨
仲りちの上より教りの雛は花　里雀
唐の明皇清明の節に闘雞をなせる事文類聚に見たり
蛤に沖も汐干そなるの　棚　三世　桃隣
唐の俗上巳士女挑ひ戯をなすと
三日齋の花をうつして油と分水中へ浸して占ひなり
さうもきとうの風なりの上　燕尾

御燈
鞦韆

天子の北斗へ燈明を奉るなり
縄を木にかけ架を立て其上に座して立てて縄を引動し
て拵の事あり
のぼり帆の浦路なるなれば汐干　太來
棒の先にて突て蛤のいる所を知るなり
汐干
蛤ふ〳〵
土佐海碁石取
石山祭　三日　粟津祭　三日　一乗寺祭　五日
修學寺祭　五日　水尾祭　九日　高雄法華會　十日
安良日花
高雄八法華會やまとなまとと云べきを斯云てしやをくる
藥師寺最勝會毎年七日最勝王經を講ずる
泉涌寺開山忌八日拾芥抄曰神修上人のなるべく建立なり初へ法輪寺とつゝ
吉野會式
子守勝手両神輿本堂へ渡御一切注修行

礼拜講
石清水臨時祭

十二三日叡山
公事根源日中辰日試樂なり舞人仁壽殿の元にて音樂あり
中午日御旅所油小路七条の南にあり二の卯日還幸
智恩寺中善道寺院にあり
雜談抄曰當世沙汰あり
公事根源曰これは太神挾井の二祭を云春花の頃疫神人と
なやまるる故この祭なりとかや
祭別にあり壬生念佛十四日にて廿四迫有る也女人祭りと称す
千本引接寺の花盛なり　比良祭　十五日
隅田より始まる　陸奥しのぶ　梅若忌　女藤紫

稲荷御出
善道寺忌
祇園一切經會
鎮花祭

壬生念佛
壬生寺
千本念佛
梅若祭

嵯峨大念佛
勸學會
人麿祭
浅草祭
御身拭
御影供
高雄女詣
順拳入
小弓引
田鼠化鶯成
花
櫻

紀事曰九日にて十五日まで
十五日真林寺月輪院に行と朗詠注
十八日南都枌本寺に塔なり
十八日武州金龍山にあり
もゝ水にぬるる小こもゝ少弟拭　桃号
数りてそゝ桃も匂へよ　桃一
廿一日御影供を修す敬に女人登山をゆるす
春大拳に入るゆゑあり
飛鳥井雅章卿曰決曰春小弓の遊ひあるとも云夏なり
月令に見へたり清明節の氣候
花の雲清水上野の淺草の　芭蕉
世は中々三日見ぬ間に桜かな　蓼太

桃
海棠
萍生初
李の花
杏の花
林檎の花
梨の花
棠梨
果の花
小梅の花
石榴花

櫻は名類畧也

白桃や雪も落るを子の文　桃翁
海棠の淡々と赤しや朝ぼらけ　千眼
うきふさは二葉や清る水の上　浪花　露橋
雪雲よ賜ぶ雨すこし　桃賀
城住ふかのんびり古壁泪　露橋
水香の里やつまんこの花さうり　桃夢
別れ惜よ泣きも笑ひ梨の雨　菓人
やはあしやあき花よりも瓦　孤跡
菓かろれよ歩くは花のさうり式　但雨
和漢三才圖會に庭梅と出るとも同き乎
石榴花や主者山の行者堂　露橋

蕪房花
楊梅花
馬酔木花
木瓜花
木蓮華
辛夷
長春
沉丁花
躑躅
令法
藤
通草花

山百合はもの花や日のうつ　椿籬
やはらぐ〜のちる日や風の後てう　桃祇
木の新よりのちる咲り川の岸　桃中
木瓜咲や酒樽ぶつ濁り川　桃三
山椒の淡々咲きり未まんけ　桃祇
巣よりちりて蜂の群書るこふ　下総国山奴
も夷やうの新ありよ花の数　雁戸
ちり過の仆よ白ゝや沉丁花　桃紅
日のうつ川ふ山よはしの盛り式　雨光
藻塩草に日ハクツ〜りとしふ木の芽
白ゝ〜の花さうり花の松　松婦
大和本艸日のびゞ〜夢艸さうり

こてまり花　雪窓の木は冬の月や小菜花　双羽
小手まり　小ぐはりや日も暮けり菊の法　桃舞
山吹　山吹や清水流るる岩屋こち　桃處
連翹　連きゝやこゝ去年結ひし垣の西　春蝶
高麗菓　こゝはきくの花よりやめる小球　仝
春菓　夏きくやふる根さまさる咲かゝる　仝
仙臺萩　野の家や仙臺萩のなれさけ　桃從
春蘭花　和名ホクリ蘭に似て小ぶり山中に多くなり
東菓　雜談抄曰高麗菓の別種なり
九輪艸　上一のくゝ落うゝ花や九輪艸　吳仙
金鳳花　大和本艸曰河骨の花に似て毒艸なり
丁子草　紅蓼くゝりうゝ多り丁子艸　荷流

化倫艸　なけひちるて下の蓼やゝひ倫艸　大夢
華蔓艸　畔ゝは蔓ゝかゝむ華ん蔓　桃雪
金盞花　紫ゝれハ花ゝ紅ゝ金ん花　桃雨
母子艸　弱ゝゝゝ母ゝ金ん花　桃祇
馬藺　葉似蘺而長厚三月開紫碧花
櫻艸　水打もおゝ櫻さ久ゝ艸　梅魚
菫　濡ゝもゝゝ摘ゝ菫　嘉月
蒴　かり迫の柘植のりゝ蒴　淇園
丑形　うゝ寺西は一畝ハゝ丑形　漱石
芽花　葵もゝゝや牧ゝほゝけ芽花　文阿
菊分根　生ゝもゝゝ根ゝ菊分根　春蝶
奈毛美　ゝゝ艸自ゝ奈毛美云艸有毒ゝゝゝ人此艸を丹ゝ治ゝ

若荷竹　桃谷
若菰　藤紫
榕の花　桃雨
柿の葉　重五
茶摘　冬嶠
三月大根　梅松
弥生山　桃水
雲に入鳥　一河
鳥帰　桃霞
麥鶉
櫻魚
櫻鯛

麓掃くこゝろ八若葉の蔭に八
ちゝ雪はかくれぬ岩やうまこも
風をうつの榕の花の上　桃雨
花と若葉と両説ありて接る花とよむや
山畑の蕨摘もかさなる夕日の影　重五
西は日の青くこゝや夏の野大根　冬嶠
胡風も涌もの山と動くなり　梅松
多一ッ雲に入り夏の山　桃水
落て近く鳴ける帰る鳥　一河
麦うゑ〳〵呼や鳥未は落けり　桃霞
常陸桜川の浦にて白魚に似る魚をとる
青　鮫　鱗の市やさゝ〳〵鯛　南鮮

櫻鰹
櫻貝
柳鯰
若鮎
上魚蒸
蚕
新桑摘
鷹の巣
呼子鳥
引残雀
八十八夜
忘霜

江州湖中に多く有り
汐底に赤きゝ貝　孤谷
水ぞこの泥きる川や柳さく人　里雀
若鮎や潮の湖に入る松の新　里川
もゝ花もむさゝ〳〵生り桑　亀椿
閑人の蔭ゝ〳〵なる蚕ゝ　亀文
蚕ゝむ写も動く摘とり茶畠　三子
鶏の巣　郭公巣ホ
和哥三鳥の傳の一ッ有り
二月引て帰る雀の引残りあるをよ
霜ゝもる花や八十八夜ゝ　雁戸
野伽汐んて帰る山路や高れ表　野雞

炉炬燵塞
ふたち
めらる時
櫻衣
春湊
夏近
夏を待
暮春 行春
春惜 春限
三月盡

ふるゝ炉のあとかゝへ廣し 仲の菴 陽雨
くゝるもやまゝ埃まれる山ゐ哉 一河
俗は蛙の啼く頃眠りを催すを云
山吹衣 裏山吹 はじ衣
新古今抄曰春の湊八ゝ有り汐事し春の集る所をいふ
裸ゐもとへゝ湊辺や夏ちかし 静江
夏とゝ月乞ゝ人ゝ扇折 女藤紫
若ゝあゝぬ淺の窓や蓮の葉 桃處
家ゝかゝぬ山風ゝ葵おしこりり 其毛
木ゝ風の中あれて妻は多殊うる 三蘿

夏之部

四月

炎帝 帝 祝融 神 昊天 朱明 蒸砂
仲呂 律 立夏 節 小滿 中 孟夏 蹕蹟 余月
乾月 卯月 卯花月 花殘月 ことゝゝの月

更衣
白重 卯花衣 袷 綿袷 夏羽織
ゝゝ帯
あらゝさき 合羽や ゝゝの衣之 桃翁
御湯殿記曰五月十日ゝゝ女房以下附帯ゝ洞中のゝゝ
凡俗は四月朔日ゝゝも用ゐ
更衣ゝ御殿ゝ掛る
扇とゝふ扇を拜ゐゝ云夏ゝり年中行事ゝ委ゝ
一日夫を持ゝ數ゝ鍋をゝゝきて女の詣るゝゝ
御氷供ゝゝゝ四月一日ゝゝ九月尽ゝ
吾簾
孟夏旬
筑紫手祭
供ス氷ヲ

住吉卯祭　上卯日　大神祭　上卯日　稲荷祭　上卯日
山科祭　上巳日　八瀬祭　上辰日　平野祭　上申日
江文八幡祭　中卯日　多賀祭　上巳日　堅田祭　上巳日
手安天神祭　午日　杜本祭　上申日　松尾祭　上申日
當麻祭　上申日　當宗祭　上酉日　梅宮祭　上酉日
大津祭　上戌日　山崎日使　三月或ハ三月ニ有リ
水屋能
唐瓶詣祭
三面ニ南都春日ニ有四座の猿樂不勤地の人能を施ス
四日此両社大和ヨリ大風風神の祭あり
凝階の祭
灌佛
七日是ハ二月別見の時成選の短冊を式部ヨリ出て奏を大臣奏ス
浴佛　佛生會　龍華會　佛産湯　甘水　五香水　ソセ茂
戒壇堂開帳
八日叡山ヨリ
花摘
鷹塲入
山崎祭
練供養
伊勢神衣祭
高野花供
千團子
日光祭
久世祭
國祭
関白賀茂詣
加茂祭

八日叡山ヨリ女人ヲ見ルヽ花摘の社へ詣ス
春ハ百看抄日四月八日春ヲ惜ヘ乃ヽ毛ヲ人ヲ
八日　清水地主祭　九日
十四日中將姫の忌日あり
十四日麻積連ヽヨリ氏人麻ヲ以テ衣和衣を織て神明ヨリ
弘法大師の御衣を取ヽ
十六日三井寺鬼子母神ヨリ童詣て團子千ヲ也
十七日　和歌祭　十七日　菅宮祭　中午日
中巳日　向日明神祭　中辰日　山王祭　中申日
中申日
加茂祭の前日よりあり公事根源ヨリ
中酉日上加茂下加茂両神の祭なり今日を御形の日ヽ

葵祭　御形日　葵かつら　諸かづら
神祭　忌さし　榊取　榊さし
三枝祭　是卒川の祭をいふとぞ
吉田祭　中子日春日社に同神あり
駒牽　是八四月廿八日八月七名八同じくれと季ゝ八公事根源なり
土塔會　十五日天王寺なり
矢數　洛三十三間堂毎年晴天をうかゞひ此事を作る
松前渡　賣人産物交易のこと
梅天　孟夏の天氣をいふ
和清天　文選なり源氏ハ和してすゝ清しとよむ
煮酒　夏日酒の氣味をうしなはざる爲の法なり
餘花　春ハかれて咲花をいふ

若葉　弟嗚の詞を吟ずや　夕ゝ
新樹　若葉同物なり　其角
若葉花　餘花と同じくして增山の井よりて出を
若楓　色ふくむ姿ゝ　若楓　都秀
ゝ　夏山ハ色賢りそをいふ病葉と書
夏木立　ゝ姿うるはしき　野萩
木草茂　日ゝ繁りハ茂る　紫笛
木下闇　切水の外ゝ　風至
櫻の實　実さくらを拾ふ人　雀千
卯花　卯の花や　桃雨
厚木花　ゝ　山香
桐花　漆　塚は門を　紫笛

柑類花　白葉
凰橘　平砂
山菅の花　咸渕
櫻桃の花　越後　時來
繡毬花　五柳
茨花　嵐雪
岩梨　一苞
白丁花　泉々
要花　六支
蕣椿　北秀
天蓼　五柳
覆盆子　越後　風々

牡丹　遊翁
芍藥　東隈
杜若　桃翁
茅子の花　珍頭
常盤木の落葉　冬木の落葉を云
葵
蜀葵
美人草　越後　夫成
鷹爪　山香
宝鐸花　越後　桃流
胡蝶花　春蝶
石藤　泉貝

胡麻まる紀の山里や茅こうん　白葉
あちこち彩や花さく人葵の引つき　平砂
山菅の如や小糸の末の麦　咸渕
羅伽橋の水よ流るる春ろの如　越後　時來
風そよ〳〵まさりけ如や緑は先　五柳
むつ〳〵武中よ雪もなり如　嵐雪
岩如〳〵や蔵京のつはえ北蕎　一苞
流〳〵る如や〳〵き白丁花　泉々
うるおさ〳〵服よ朽きり葉垣根　六支
納の名へ〳〵きや月や蔵つき　北秀
まる〳〵ひの花は白さよ掌の松　五柳
里の名は馬出るいちとれ　越後　風々

山下りて名〳〵ことの一つ侍きん式　遊翁
苔菓や郷よ花あき寺は屋　東隈
星は井の名〳〵もなのりや牡丹　桃翁
門守の杉佛も淺〳〵けーの如　珍頭

冬木の落葉を云

梨園三才圖會ニ曰山州加茂山中ニ有二葵一
咲光る花や あつひの一葵ろう　越後　夫成
石瀧は地蕎よ咲や美人艸　山香
菖蒲同とよ〳〵も道ろ〳〵ま式　越後　桃流
俗ニ軌の提灯と云ものそ
俗ニ意〳〵麦は〳〵く家や ちやづけ如　春蝶
いそ あづけ蔓よ ぱ〳〵や 茅の音　泉貝

いちはつ　世好
白及　越後　風夕
風車花　吳仙
おくり草　旧箒
羊蹄花　重磨
鴨足草　桃戸
石蕗花
蘭の花
茶挽草
玉蜀花
夏柿草
玉巻葛

いちはつや菩提積し塔の際
ちらん植ゝすぐ嘉祥は数寄屋式
塩ふさく寺のふ屋や風ふかぬ
何人の行ゝ弁戸ありおくり草
ぎしゝと学ハおくしや草は花
弁は舞りよたしゝむく白ゝ蕗の不
時珍々説の石蕗ハ軒下は樹て愛する是ゆや
蘭のゆや吏ゝ漱ゝきに是ゆ
花ゝよ行ゝ蕗ゝ屋や茶挽草
和名沼波利久佐又云豆知波利
場士の上ゝかゝ是ゆりゝ不草
蕗ふく玉巻葛のゝ葉ゝの葛

石二
吐貝
不及
古友

玉巻芭蕉　古水
筒　三從
篠子
苔薹
蓮の浮葉　桃瑞
蓮のえな　泉々
綿蒔
麥蕎菓笛
麥秋
麥苅
きゝゝ
老鶯

玉巻芭蕉
筒は篠小竹なり
篠子は苔薹は蓮の浮葉
蓮のえなは蓮の蘂これを取喰　和名抄井奥義抄
山のけや綿蒔は麥の用ゆる畑
麥ちゝゝきは麥を吹り麥ゝ南
麥秋やうちよ苅ゝ人ハ蛍
かり平麥の白しや宿は内
汐は麥の翁や弟子の行ゝ子
うゝひは老は花と明りり仮の宿

山井
桃賀
順馨
利牛
芳紅
桃紅

時鳥　桃隣
閑子鳥　桃隣
飛蟻　哥詠
蚕のとも　素口
蚕簿
枝蛙
蝌の子
蝌子
鰹鉤
初鰹
初茄子
鹿角

樹頭を樹々一声ほとゝぎす　桃隣
若葉のこゝ秋よりこゝ夕ひぐらし　桃隣
ひとゝ寸ゝ風ふく蟻式　哥詠
光陰よりもとゝ蟻式　素口
和名エビラ蚕養ふ器あり中古作りしるしの之　和漢三才圖會
雨もふく咲くやタ日は枝うつり　土柳
塩のみは鹿行下る蟹哥うれ　山香
蘋頌圖經曰鱟の類今人以為食品倭名抄よかさめ
多若はいりて蛙一や鰹つり　野流
網ひきく汐のもろくや初鰹　夕雨
雨止んく花ふるとりり初茄子　野流
鹿の角の初生を又

翡翠
扇
團扇
木布　汗
単物
涼
短夜
日傘
編笠
新茶
麨
新麥

かゝとやゝ蔭根はかゝむ　杭の之　桃紅
陰又はうゝちよかさんあつきうれ　吐貝
門へ出ゝ借今ふ扇の童扇の子　孤策
汗拭　汗取
夏羽ゝ夕ゝ行きもし和ゝ人うの　桃窓
袋の裏といさ絨ゝゝん夕きゝと　桃祇
みゝう笠や蓑唱ゝ寺の梳りと　桃雨
木文庫の弟よ雪合日うさう菊　早秋
あゝ笠のゝりゝ家ゝや茶屋のつ　桃雫
新ゝ家入る如とは匂ひや夕日　和　桃明
米麥を蒸ゝ煎で細末ゝて冷水ゝ漫ゝて用
新麥や糠ゝ入きかゝる道の艸　百呂

冷麥　桃屋
冷汁　桃陽
煮冷　水鰍　水鱧　干鱧汁
干鰕　百和
塩鳥賊
蟹鰕
洗鱸
鮮
津波須
鮎
魚築
子魚
鮫

和漢三才圖會曰カニヒシヨ塩藏の物多り
和漢三才圖會曰六月鮓の小物者五六寸三五又和奈ゝ也云
鮎の丸川へ乗込ひ夜なのけ多
築丈の川や家なる殺うゆん
揚ちよ月ゝ赤ゝ鮒の牛
烏ゆく故いつゝゝ多る丸声

知一
桃陽
切石
其角

蚊や火
蚋　蚤　蠅　蟷蜋　蚰蜒
蛭
蚯蚓
蝸牛
螢
蝙蝠
蚊帳
鴉飼
鴉舟
通鴨
方目鳥

日ゝ蚊ゝ蚊ゝ蚊

青鷺　ちる鷺や川もちらるる歟うらる　山香
夏蕨　夏うり終る人や月夜の友うらも　沂浴
夏荷　夏經　夏花　安居
青山椒　ちまるまうり殘る白ひやまき山椒　五情
荊葱　いのめちる〳〵宮や一きるかれき畑　橘二
馬歯莧　此神を町ゑ掛まゝ馬蚊不入存とゝ
苦草　そゝきふ日あ〳〵も第や　城の石　誠可
蕗　麝の中ゑ夫〳〵家〳〵蕗そゝけ　越後桃流
藜　香ふ白ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ　孤村
根芋　やゝりゝん　あつさの杖ゑ歟日ゑ　そゝ茂
蓴　茶まゝ殘る土ゆりうゝや〳〵いも　山朝
蓴菜や　園栖の義ゑ斤ゑ紫　振鷺

海松　海藻子　汐ゑの海松かゝりゝ浮九ゑ　一士
海士ゑ舟ゑ白ふ波のりや雨ゆり　桃尹

五月

雞賓律　芒種節　夏至中　仲夏　茂林

皐月　鶉月　さつき月　橘月　月不出月

一日競馬の試あり　松本祭　一日

三日六府のやめのことを南殿の階は東西に立又時の花を折〻

同〻置〻つゝ

加茂足揃　其角

献菖蒲

菖蒲葺　春蝶

早瓜供

端午

重五

芰荷

艾人蒲人

四日山城の国園〻より瞻司早瓜を奏

〻〻〻

五月の鏡　五日八重垣百練の鏡にて唐江南の船中にて鏡を鑄る事
藥日　五日をいう　是百艸を摘なり
藥草摘　宗祇抄曰きをいかりまろ〻ふ四五月に藥草をとる
競駒　是も端午に色々の艸を合て勝負する事あり
百草をたくらべる　左近の真手はくひ百公夏根源に委し
左近の真手雀　左近の真手はくひ百公夏根源に委し
引折日　近衛に隨身褐の尻を引折て着る故にひきりの日と云
競渡　鳥卓水馬　五日川に出て船の遊事なり
印地打　世諺問答曰童の小弓を以ていんちをうちあらそふ
粉團を射　滴粉團　水團　白團
桃印符　是八天平遺事　歳時雜記に委し
五日彩るかとりのきぬに篆文の符を書て悪氣を去る增山の井
赤靈符　抱朴子曰端午に赤靈巫符を作て辟兵道有事に侍るべしとも
蘭湯浴　五日蘭をたくさんへて浴する事又今の世に菖蒲の起なり
梟の羹　梟は衆物端午に百官に給る夏漢史に有り
鴟鴞の舌を去　時珍曰其舌人の舌に似て勢剛なる人のこのみて食事なり
騎射馬弓　年中行事合に五日豐樂院にて昔騎射を御覽ありしとも
神水　端午午の時に雨竹に灌るべしと
賀茂競馬　五日くらべ馬　きおひ馬　赤方黒方にして左右にわかつて馬くらべをする事
藤森祭　五日　開祭　五日　宇治祭　八日
室祭　十三日　今宮祭　十九日　両社祭　廿三日
住吉御田植　廿八日　祇園神輿洗　三十日
生玉流鏑馬　五日午の刻其装束に腹巻陳羽織を着せ
六日菖蒲　まくさ　彩に殘るなのやめは苔むす式　大夢

竹植日
有無日

おぐらぶね
御田扇
虎ノ泪雨
最勝講
賑給
五月雨
梅雨
鶯音入
帷子

陽ものも仏 植る日うゑ籠し笠 芭蕉
廿五日村上天台王の御国忌なり皆大将ゑ政事なし又急度
行ふ行ふ夏入のり依てあるべしのしゝト
廿八日是八月彼の国大原の社へ詣ゑ云
廿九日伊勢山田太神宮の御田植なり
紀事曰廿八日我祐成討ゑ日ゑ虎御前の泪雨くゝ
清涼殿うて行り
是いりやしき民ゑ米鹽ゑくゝ
五月雨のふるやや淀川 大和川 桃翁
入梅は写や二十ゑ雨成の吹ゑ 三冊 桃雨
夏四ゑしゝひゑの音八月ゑ入 越後 五節
かゑもくゝる夜ゑくゝ移ゑ蛙鳴ゑ 呉仙

辻ノ花
羅
年夏生
若竹
早苗
田植
早乙女
田唄
楝花
榊花
柘榴花
栗花

うゑ狐出る夜やや坂田の辻ノ花 桃翁
うゑうゑの残る番屋一翠 篝火内 泥亀
ゑゑ田仲ゑ日ゑ竹やや日法祇こうき窓の先 二冊 桃雨
朝ゑ蛙の音くゝ蛙る苗ゑ植 下総国 山奴
世ゑの青ん中ゑ田植ゑ雨 宜麥
早乙女やや清ゑ乳ゑ高ゑ 越後 桃雨
風流のゑゑやや夏ゑ田植ゑ 芭蕉
葉ゑ生ゑ植ゑ花やや日和結 三習
山伏くゝ入ゑ宮ゑ行ゑ花ゑ 桃号
見の新緑ゑや笋ゑ花 杭板 摂津 如蘭
秋のゑ見ゑ長くゑ行ゑ 浪花 露橋

合歡の花　宝甲
天南星　桃賀
山梔子の花　竹水
五月躑躅　一舟
南天の花　桃端
赤実柳　桃祇
忍冬花　雨朝
瞿麥　越人
石竹　幽堂
百合　桃処
ぎぼうし　古樂
紫陽花　芭蕉

四葩花　故鳳
夏菜　周賀
朝菜　桃弓
赤摘花　雨虫
紅の花　桃窓
下毛花　漱石
かくしみの花
鉄線の花
朝露艸
苔の花
鮫屋鉤艸
石菖

四葩花　一名ことぶき艸
夏菜　蓮艸花　一名ことぶき艸
朝菜　桃弓
赤摘花　山虹
紅の花　桃祇
下毛花　漱石
かくしみの花
鉄線の花
朝露艸
苔の花
鮫屋鉤艸
石菖

夏菜　夏あり　蓮艸花　一名ことぶき艸
朝菜　朝きくや日よりの花の実
赤摘花　紅の花をつゝみ赤くなり摘物あり
紅の花　花をつゝみ赤くなり日除しを出る花実
下毛花　花をつゝみ赤くなり摘物あり
かくしみの花　大和艸日小さき木にて四月花開
鉄線の花　きの方ぬかくしみ艸はさうこの
朝露艸　てりせんや夜の雪よりかゝむる雑葉
苔の花　朝風の艸　表艸又は日はのうり
鮫屋鉤艸　也国の蓼や赤法の苔のさ
石菖　陣ゝりかや治艸よやうり
石菖や流ちゝ〜き温泉水之辰

花あやめ　如何やめ懐しかるなつしうの　其角
花かつみ　八雲御抄曰蔦と陸奥にて花のことと云
真菰苅　蔦きりは如何ゆゑ志賀うり　三笑
藻刈　藻舟　藻花
萍花　うき舟の如やゆく小沈のちりはは　起石
菱の花　沈の手ゝ　手ゝ　沈こぼれ　菱の花　古石
栗蒔　稗蒔　粗蒔　胡麻蒔　蕎蒔
豌豆　ゑんどうの蔓よ附り城ゆ　雨明
そら豆　そら豆を引　越後　扇風
青梅　青梅の落る音あり窓はは　常陸　季月
梅干　日家中は梅干の匂ひや沮やしき　留川
餅梅　梅漬　梅剥

杏子　信濃路の桃ゝ　石袋
李　葉うらはよ熟して赤き李のこの　譯重
枇杷　枇杷の実や　泉貝
揚梅　やまゝは　五声
生胡桃　栗の葉の蔵り
桑實　栗嵐　桃賀
早松茸　栗のゝ付清水の末を流れ　思慮
荒布苅　逸近よ探きく山や　誠可
和布苅　切株ゝ　六妙
越瓜　胡瓜　胡瓜や　桃祇
茄子　操瓜
新茄和　つゝやゝ　茄子
世人茄子の考人きの　世人きけの梅和しう　惟然

鯨
蟹子　きりぐす　虫　蛇衣脱
水馬
蟬
水雞
諸鳥毛をかゆる
浮巣
鴨の子
羽毛鳥
黒鴨
鹿子
鯨狩照射火串

蘇賣はさてやさの夕涼山　石二
月の時明り　桃瑞
の緑よりうさと初る日こう郎　桃祇
馬士の素くゝ毛ふる雨や江の里　百和
水鳥の巣
よゝこゝまこゝ芦をとこゝん浮巣式　桃紅
夕垢離や鶯の子拾ふ水清し　順翠
いつる日よ向ひちうゝや桐ぬける　雪国
蛍籠や蔭の根くゝる雨ゆうり　思軽
波垣やいつくゝ鹿るの毛ひろ　曽良
八雲御社日矢大火ぎ具さくゝゆう鹿を間近奇て朝ゆうもう

獣狩
五月闇
黒ゝ白ゝ

どうしのこゝろて沖山る鹿そくゝ時用る
年ゝ寄は長ゝよりの事ゝ　獣狩　桃屋
留る門くゝく掛て　梅雨中の空合とゝ　五月雨　桃幾

六月

林鐘律　小暑節　大暑中　季夏　風期　旦月
遯月　水無月　風待月　鳴神月　常夏月

氷室
氷室御調
氷のもち
氷室雪間櫻
氷餅祝
勝曼衆
不二詣
忌日御飯を供
一夜酒

胡桃ようかん　虎ようかん　氷ようかん　氷ようかん　梅人
四月より九月迄献ずれども六月一日より貯置て用ゆる故なり
氷水　増山井日御膳おも氷を用ゆるを云なり
千載集に氷室山とうさうを奉る同雪も夏
増山井日氷餅を氷に准て一日に用
一日摂及四天王寺愛染明王開帳
[illegible]　不二詣　播二
一日内膳司より奉る不浄の火をあらためる支えるに公事根源
移りまする　楠の[illegible]　秀や一夜酒　桃窓

六月會
御躰御ド
月次祭
神今食
解齋御粥
祇園會
同館時祭
嚴嶋祭
焚田祭
博多祭
芦の神輿
河原涼

傳教大師の忌日なれば延暦寺にて行はる勅使立
十日神祇官の官人主上の玉躰御慎ひ[illegible]支を占奏
十日年に両度なり伊勢大神宮を勧請ありて天子神供を供せらる
十二日神今食の次に朝なり公事根源に云
[illegible]　一ト群　紅波り　旧篇
十五日勅使立
十五日　竹生島祭　十四日　津嶋祭　十四日十五日
十四日　江名山王祭　十五日　伊勢祭礼　十六日十七日
十六日十七日　志渡寺祭　十七日
毎年十五日津嶋少て此神支ひり
四条河原納涼七日より十八日に至る

かはり嘉定

十六日紀事日嘉定通宝十六枚をうつして食物をうつし昌定を服
せハ其家ニ福あり

相國寺懺法　十七日桟門ゆて松風くゝ鏡鉢を鳴らして

座頭涼　十九日清聚菴ゆて行

鞍馬竹切　廿日昔峯延和尚大蛇を亡したるよし

御手洗詣　十九日くゝ三十日まて　紀納涼　同上

上難波御祓　二十一日　座广御祓　廿二日　愛岩千日詣　廿四日

橋立祭　廿五日　天満御祓　廿五日　住吉御祓同火暦　廿日

賀茂六月能　三十日の夜上加茂の神事音樂あり紀夏ニ委ス

唐崎参　三十日源氏乙女の巻ニあり今八千日詣ゝ

節折　三十日竹ゆて主上の御くしの寸法をとりて其程ニ折りて
ゆへいよ行りくゝふし公事根源ニ

大祓　晦日公事根源曰百官朱雀門ニ集て祓ヘて侍ゝ

名越祓　夢輪　菅貫　形代　撫物

麻葉流　廊ゆ麻ゆ流くゝ岸や宇の新　故鳳

夏神楽　寺を青ゆて笛も源ゝや夏神乐　士若

川社　祈宜ゆ子の裸祓りや川ゆ祓　百和

小蝿声神　負德云蝿の如く悪神多きとゝ

御祓川　糠ゆ子ゆ新清ゆ前ゆ由　祓川　桃池

鎮火祭　晦日卜部氏の人火を打て宮城の四角ゆて祭

道饗祭　晦日四角四界の祭也公事根源ニ委ス

施米　米鹽をわの手ゆ打ゝ施ゝ事公事根源ニ見へゝり

雷陣　雷の声三度高く聞ゆ六大將以下近衛の六將ゆて弓矢を帯して
御殿の孫廂ニ候して帝を守護し奉る

温風　鷹の羽ばたき習　腐草螢と習　溽暑　天貺節

暑　りをつの人くもゝとゝとけ　ゆつさ哉　越後　桃流

夕立　夕ちよ亦の〳〵月や　松けうん　丈艸

三伏　夏至の後第三の庚を初伏と云四の庚を中伏と云立秋の後初の庚を末伏と云

土用　ちき人のゆ小袖も今やた用ひ　ちゝ成

虫干　ひ〳〵ニテや青へ吹迄多け明根　二世　桃雨

露涼　弗よ面く〳〵ちゝ涼〳〵きゝ夕ゝ成　山蟻

風薫　諸樓の風の〳〵ゆり　今園寺　百和

青嵐　今日はかくる澤瀉殿の青ゆゝし　其角

雲峯　山寺や岩よ貢〳〵る雲　けう孤　桃翁

納涼　すゝ〳〵さや弗ゆり藪に〳〵ゝ　半残

掛香　かけ香や巻中合の時斗の習　左櫻

泉　泉殿　滝殿　鴛鴦涼　水掛合

清水　山伏の法　塚こゝ清ゝう郭　百和

さゝ〳〵井　さゝ〳〵井や〳〵ゝ濁よ高ゝ堀の脂　桃嶺

船遊　丁目ゝ月ゝ〳〵ゝ月ゝ松　一河

川狩　川狩や沖の入帆の屑ゝ　桃祇

鵜釣　夕釣よ鵜ゝ船ゝ沼ゝ鵜ゝ　東桥

雲雀鷹　雲雀ゝこゝ〳〵ゝ墨〳〵　千松

越雲雀　近ゝやゝこの中ゝ沼ゝ　振鷺

火取虫　追ゝ行ゝゝ沼ゝ　雲嶋

すゝ〳〵ゝ　すゝ〳〵ゝ虫　鐘諸声

空蟬　奥義抄曰空蟬ハ脱殼ゝうゝ生ゝる蟬ゝ云

蟬のぬけがら　一

魄

毛虫

竹皮脱

百紅

射干

麒麟艸

蓮の花

沢瀉

赤草

盆顔

夕貝

脱殼し蟬の亮こる楷の部　女藤紫

拭ふ〳〵光る竈や魄のごとく　五声

蟬よ命の短しとはこゝぬ毛虫かな　静江

胡麻殼よ濡〳〵蓋も半の皮　桃処

うつり行花のうつり〳〵桂もぐさ　除松

ひわふきの花や岩〳〵築地跡　三川

ゆる蟬よ濡濡かきてん艸　成渕

白蓮や夜明るまでは迎の音　静江

れもうや虞美人を水よ毒あれう　九口

水艸あり

蓋鳥や〳〵小禁この紀　浪花　露橋

夕の風や〳〵朝出て家は宅　〃　成

瓢の花

干瓢剥

凌霄花

風蘭

虎尾草

眼皮

鷺艸

鉤鐘草

葛の花

楮の花

綿の花

蒲穂

ゆよ〳〵ぬやさ〳〵き花の幼ごゝろ　錦鳥

新干瓢

のゝもんのむうゝ〳〵朝の雨　丈中

風蓋や蓋の蓋〳〵岩は濡　下総沼田　山奴

人ゝ〳〵ぬ虎の尾艸や牛の涎　野流

暑ゆもやうけぬかん辺や花の数　越後　桃寒

蓋ゆ艸のおさよ朝の川むうひ　五英

ゆよ外沼蓮艸のさゝう都　桃蹊

蓋のゝ紙や古井戸の頃　女　桃長

ゆ〳〵紙よ〳〵ゝ〳〵ゝ拾の幕ふ一　桃支

ゝの花ゆまゝ〳〵葉よ似るゝ家　素堂

蒲の穂は出ゝ〳〵松よ折ら逃り　桃從

田草取　百姓の妻子多れ　田植　玉兎
蘭苅　多はなを追ふ　きる蘭　吳仙
菅苅　藍苅　白麻苅　麻苅　櫻麻
青田　黄香の雨とまう　多る青田う郷　桃雨
かゝむし　奈良さらしを織糸る作る
麻　麻苅を夏こ一番苅こ利こ
夏引糸　夏引の糸繰る　ちゝ　ゆ　ひ　谷に　左角
茗荷汁　ちゝ塚の向ひ　ゆ　延　めうが　竹　也江
青唐こし　青〳〵　細　こ　こ　古　こ　こ　こ　こ　こ　桃弓
小角豆　人も来る山源　ち　の　ま　け　の　越後桃寒
藕豆　枯朱　いん　ん　こ　や　藪　こ　け　羽田
青鬼灯　滝　地　の　わ　ゝ　ま　ず　青　し　窓　の　屋　里時雨

紫藕　蒐　蒐の葉の茶籠　蒿平
瓜　夏のそうきうれ　春鰒
林檎　風こと月日法は　石二
奈良漬製　やはらかそ潮壷　潮石
夏切茶　ゆ　ゆ　ゆ　や　林檎　林　ゝ　茂　ゆ　ゝ
麻地酒　納豆醤油こと　何ま　造八夏苅
水飯　洗飯　笑　切は　ま　ま　ゝ　字　法　の　夜　り　式　山口
引飯　乾飯　和漢三才圖會ま　南都麻地酒こ　り
菖水　菖水こ今汲セ　り　沢の井戸　亀文
心太　山の湯こ日を　ん　ん　ん

簟
抱籠
竹夫人
霍乱
夏ふ―
雨乞
夏深―
秋近
夏のひる

窓ふかく小至庵のあるやたらひ―ら　芭蕉
抱籠の明すあるきさそうくう郎　伴蓑
竹夫人の抱夜し寒ー竹婦人　山奴
香霍散　香霍と斗も夏あり
茨菰中頭瘡の發しるを云
雨乞やいつよりたつ雲ふ帯　桃霞
夏ふかし―茅ヲ埋する京の屋　一鳥
秋近し―そるく涼―や峯の空　五悦
夏の景　秋を隣　秋を待

秋之部

七月

少暉帝　孝收神　昊天　白藏　金商
庚則律　立秋節　處暑中　孟秋　桐秋
相月　蘭月　文月　女郎花月　親月

初秋
残暑
一葉
柳散
施餓鬼
北野御手洗
摂待

ふるうもる四ま山暑―今朝の秋　三世　桃隣
秋暑―いまれ暑神　柳塵　桃翁
我宿の淋―さむく桐一葉　芭蕉
拍子ぬき姿ふ―ものやちる柳　春蝶
一日より十五日まで
六日社頭のすゝきハ七日より
茶ヲ引未の人ヲ飲まく魂祭の月其ヲ踏ばし

机硯洗　六日童の机硯を洗ふなり北野の神事ふるあり　嵐雪
灯篭　盆まつりハ秋のきゝ門の灯篭うれ　徳布
踊　七化の景ハ州ヶ崎ハ明ケ方ハ踊ふり南　挑翁
七夕　まつり祇園ハ八ツ半ヶ七日の天の川

秋太姫　薫姫　さかる姫　百子姫　糸織姫　朝顔姫
梶葉姫　二星　牽牛　蠟女　大飼星　河鼓
男七夕　女七夕　ひこ〳〵妻　牛女　星製　星合
秋太衣　天の川　銀河　星河　銀漢　烏鵲橋
紅葉橋　年渡　彦星　乞巧奠　西涙雨　七筒池
百筒池　妻迎舟　妻越舟　七種舟　星祭　星年向
願糸　星薫　庭立琴　星の貸物　梶の葉　芋葉露
飛鳥井鞠　紀事曰七夕ハ飛鳥井家并難波家ハ蹴鞠の會恒例也

池の坊立花　七日洛六角堂ハ盛り　聖夫迎ハ都人参りて鐘撞夏ハ
本願寺篭花　七日草花を以て色々の作物立花ハ盛り　同日六道茶ハ求めて魂祭ハ前ハ供を
七日御節供　内膳司より是を調進ス公事根源ハ委し　九日十日茶詰四万六千日ハ盛るこゝ
道の峯入　本山ハ七月當山ハ八月　多賀市ハ盛り〳〵おのゝ〳〵ふく色　桃雪
文珠會　八日東寺西寺ハ行ふ　十五日ハ
六道茶　九日建仁寺の南ハ盛り　きのふ人〳〵や蘭ハ多ふ盛ふ　其角
槙賣
清水千日詣　棚經　掛そうめん　麻がら著ホ
盆市
中元
魂祭
聖靈棚

墓祭

一家うちの杖よりこうそうはせ登る　芭蕉

鼠尾艸　こうそうや小川より白き蓮の新　春蝶

生身魂

此世より父母持る人生身魂〳〵て祝ひ侍る

蓮飯刺鯖

中元生身魂の祝用ゐり

三井寺灸詣

十五日常ゝ女人不詣今日より免し侍る

夏書納

夏たりて後是を堂塔伽藍に納る

夏解艸

釈氏要覽曰浙右の僧解夏の日線をもて茆をはりて檀越に贈る云〻

水灯會

宇治川船中修之水中施食の法事あり

送火

むかりやうかり沙も書すれば　羅風

施火焼

大文字火　十六日紀事曰今夜東山浄土寺の山上に薪を以て大字を焼

鳥居火

十六日愛宕山　船形火　同日　船岡山　妙法火　同日北一松崎

盂蘭盆

経木流

十六日経木の面に法名を印し四天王寺に亀井の水を手向る

閻魔参

同日　八幡安居頭　十五日　今八十月十五日なり

〻〻〻

鷹祭鳥　月令曰鷹鳥乃チ祭鳥

愛宕火　攝州愛宕山廿四日の夜種々の灯籠に火を燃して祭る

地蔵祭　廿七日

穂屋　御狭山祭　廿四日　山畠　南露

相撲　存義

こゝう使　鳩吹

花火　積羽

ひやうの扇置　汗樽　其毛

稲妻　雨夕

粉米

田畑虫送　年よりて五穀の虫のはきて拾ひとる時民是を贈る

楸　柞　楓　檀　檀

荻　秋海棠

藤袴　秋海棠　梅人

蘭　桃瑞

朝顔　百和

桔梗　杉風

沢桔梗　春来

女郎花

花ほとちのむ

女郎花に似て花白きも男へしらず

仙翁花　觀音艸　益母艸　うこんの花　曼殊沙花　蜀慶艸

翁艸　菊小艸　毛茛　茶白　[illegible]

鷹の夏蒜　[illegible]

茅切草　[illegible]秀ま寺　蜀葵　[illegible]　振鷺

鳳仙花　[illegible]　秋の蝶　桃瑞

[illegible]　[illegible]　桃祇

野菓　[illegible]　[illegible]　木屋

茗荷の花　[illegible]　[illegible]　來明

灸花　[illegible]　[illegible]　花暁

[illegible]　月の[illegible]　[illegible]　故鳳

[illegible]　[illegible]　[illegible]　五岳

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]

室のゝやゝ早稲　立幾内にて苗代の床を室とゝいふよし又八重垣を室とゝいふ八稲の名なりとぞ

二百十日　立春の日より算ゝて二百十日なり

秋風　かゝる〳〵拔てゆる蔦や秋のゝ　秋風

初嵐　吹崩す古稲塚やくんぬし　五声

蛍　声さびし〳〵卿さま〳〵きり〳〵す　青露

蟋蟀　かゝるゝきやゝ糸の出は捨去蔵　田太

ちゝろ

稲蓑　冬蟲　蟷螂　ハタ〳〵

虫　火を焚〳〵小反竹敷や虫の声　桃雨

鈴虫　松虫　書虫

蜩　日〳〵やゝ系ゝ一ト本の松は風　里風

蜻蛉　又毒てゝも一ッ水鳴ふ蜻蛉うれ　梧井

残蚊

秋胡蝶

秋螢

龍田姫

律の調

千秋樂

霧

露

身ゝ〳〵も

雅柴

薄

葛葉

残る蚊のゝくうれ〳〵鳴ゝ　雨明

千秋樂き秋の鶴はいのちうれ　石二

水仙もゝ〳〵流ゝ秋のゝきる式　桃宴

八重垣る秋を司る神なり

貞徳曰律の調八秋也

盤渉調曲也

鶏きりや松ゝ〳〵晴ゝ海の面　桃隣

胡蝶はけゝ霧の霧り式　樓川

月　新月　其外月の異名ホ

雅の葉　柾

年〳〵は古根ゝるきす〳〵き式　俊似

静なる蔦の下葉や反ゝ所　古声

真葛
忍艸
蔦
花壇
草花
花野
芭蕉
鶏頭花
雞頭花
葉雞頭
雁來紅
茅萱

赤松の宮ゆ[illegible]多き[illegible]を百[illegible]れ　其流
又上る[illegible]や[illegible]の茶　九川
艸[illegible]は殘[illegible]て廊[illegible]る[illegible]　桃咢
花壇を秋[illegible]する八秋の艸花を愛[illegible]
下りて居る[illegible]も人[illegible]り艸の[illegible]　藤潭　山奴
[illegible]は新[illegible]花[illegible]は[illegible]り[illegible]　仝
寺[illegible]殘[illegible]殘る[illegible]殘り[illegible]艸の中　亜　桃雨
一名イキノサ
[illegible]の[illegible]も[illegible]や[illegible]　遠及　桃処
吹[illegible]を[illegible]小[illegible]紙[illegible]　桃窓
秋艸子[illegible]花つ[illegible]は花鳳來[illegible]書[illegible]百葉[illegible]同物
中[illegible]艸　犬子艸

鬼灯
蕃椒
若煙草
布瓜
南瓜
冬瓜
薑
牛房引
芋
ヤマノイモ
菓
柿

[illegible]つきや　妹[illegible]ひの小石臺　桃從
青[illegible]も有べきこのを[illegible]　[illegible]
女[illegible]き[illegible]ひ[illegible]　各仙
蔓[illegible]る[illegible]　五声
何[illegible]の種蔬　初[illegible]かほちゃ[illegible]　中考
朝市は[illegible]も[illegible]　吳仙
[illegible]を賣[illegible]秋の[illegible]　雲州　梅長
油[illegible]は夕やこほ[illegible]引　冬英
[illegible]めや芋の[illegible]　故鳳
又カコ　ツノ子イモ　ズイキ
紫[illegible]の[illegible]ミッ[illegible]の実[illegible]　一棟
つり柿や[illegible]子[illegible]ふ[illegible]日新　丈艸

梨子　門並の黍ふる年あり甲良路　野流
田色　田奄　小田守　晩稲守
宗山子　ひろ〳〵拾ひ物のそか〳〵れ　桃翁
鳴子　魂の窓こゝ通ふ物るふこゝ　宗瑞
鳥花〳〵　鳴子　引板　焼しめ　漆水
木綿取　朝〳〵井手の葉や木綿〳〵　枝先
鹿　かき暮る自の夜泊し鹿の声　桃祇
藤任皇者　八重堰我〳〵元宝の鳴こゝ秋あり
蛙蛸鳴　みゝを鳴く秋や爰ふ〳〵毎の貝　李明
蓑虫なく　鳴〳〵多くこゝのむしかなし蓑の垣　長古
鴨　牛鳴る声ふ暗ふ月夕ふれ　支考
鶏　深草ふ〳〵世を紙をふ〳〵ふ　宗瑞

鴨　鴨鳴く　鶏されかゝる梢れ　桃隣
鱸　鶏（ヒイコ）　絡ひもなりふし鱸はり　半残
鯊　ふゝはりの双〳〵寄り秋の海　孤雄
鰐　小ふし　江鮒　小鯽　さゝき膾
鰯引　月〳〵ふ小いふし光る網引れ　知道
鰻築　晨朝の浦ふ寺り縵やな　石二

八月

南呂律　白露節　秋分中　仲秋　竹春　壯月
桂月　葉月　秋風月　月見月　雁來月

八朔　たのむの祝
繪行器　後深草院堀米を折鋪に器あるを入て相贈る是公事根源委
後深草院の頃より始るなり　なりて米を折鋪をるを入て
相贈　今は行器に菓を入て贈り侍る公事根源抄委
天中節　日赤口白舌隨節城と書て門に押へ火難盗病口舌の災を除
三村祭　堺の大寺又作水村　二日　堺天神祭　四日　北野祭　四日
白髭開帳　五日　敦賀祭　十日
待宵　待宵は二見の浦の名月　其角
名月　名月は夜更て水に居る也　素丸
十六夜　十六夜の月の出しめす　さ七郎

司召　京官六位以上藝能を司る榮爵なり
放生會　放生會　春蝶
八幡祭　十五日　霍ヶ岡祭礼　同日　筑紫宇佐宮祭　同日
志賀八幡祭　同日　筑前箱崎祭　同日　河州響田祭　同日
伊勢尚野津祭　同日　三津八幡祭　同日　豊浦祭　同日
野口念佛　同日播州加古郡教信寺なり
駒牽　公事根源曰公卿以下次第に御馬を牽引る
駒迎　毛附　引渡　駒むかへ　其毛
菅大臣祭　十六日　御靈祭　十八日　來宮祭　十八日
菩薩祭　廿二日長崎にて船の神を祭るなり
西院祭　廿八日　秋宮　中宮の事なり
秋社　秋分の前後に近き戌の日五穀の神を祭る日也

後の彼岸
死治杖祭
初汐
野分
漸寒
初紅葉
磯
長夜
薄荷
名木散
牡丹根分
木芙蓉

蛇穴に入る　釈奠春に同一

昔八毎年八月祭まる中職原北の注に云へり

初汐や男川菜洗ふ川辺みち　田太
初汐や男川菜洗ふ川辺みち　猿蓑
初汐や男川菜洗ふ川辺みち　夫來
中秋や海月世界こう郷　桃尹
中秋や海月世界こう郷　宗瑞
中秋や海月世界こう郷　桃窓
秋世界こう郷の日和や初茄子の味
秋世界こう郷の日和や初茄子の味
秋世界こう郷の日和や初茄子の味
秋半り過る張の里　知
もつき夜や　獨蓋　皆つ
葉牡丹　和漢三才圖會に代烟草吃烟
野山色
児行く　送る母さんの子根の花　哥裔
枯く葉も又絵に似たり赤ふ　思輕

木犀
桂花
梅嫌
金剛牡
檀特花
花紫
白粉花
烏頭
苅豆
紫菀
露牡
宇治花園

木犀や人人唐めく　其角
花の香る寺やうつ山おろし　桃嶺
芙蓉むらの村中に笑ひ梅嫌　思輕
牡丹うつ宮ちかまり弱一ぬき　桃雪
たんくに花ちり寺に流る　桃祇
御傘に紫の花秋の花　青露
おり詠れの蚊や屋に根の上
花の形烏甲に似たり葉に附子
かるやに川殘さ仏　木水
よ仏のみ人うつ迄きとうれ　梅人
仙覺抄曰鴨跡牡丹草と和に月草に露牡あり
むうつ人の涙や嘉祐人世と宇治山の秋の花　慈鎮

薄穂　其好
尾花　石二
龍膽
黄蜀葵
煙草花
漆花　一士
藍花　仙鳳
蓼花　徳布
蕎麥花　菊雅
芦花　一角
木賊苅　千霍
茜堀　桃賀
　　素九

穂ゝ出るも所ゝ新芽の所ゝ落ル
刈人もつゝ人ゝ尾花ゝ芋々の月
八雲御抄ゝ云ゝ神尾花ゝ
ゝゝゝ云楮の皮汁ゝ和ゝ紙をはる
ゝゝゝ咲るたゝとゝ
ゝゝゝ苅ゝ
蛇の毒ゝ毒ゝ蛇も深ゝ
苅ゝ移り
芽葉のるゝ
ゝゝ人ゝ朝ゝ
面の白ゝ
藻の又の減ゝ
ゝめいゝの山ゝ

ゝゝ引ゝ
俗ゝ手振
ゝゝ俳諧新式胡黄連ゝ通俗志苦参ゝ別種ゝ

藥堀　九抓
萱苅　仙哥
拓櫨　里雪
銀杏實
天瓜
種瓢
離豆
菱取
農美人
菌

ゝゝ渡ゝ茶ゝ
ゝゝ武蔵ゝ
ゝゝ
苗香實　荔支　通草　新蠶草
川ゝ
ゝの牙
豆一粒植ゝ豆八斗ゝ得ゝ救荒本ゝ十キン草ゝ云ゝ
ゝゝの巻ゝ
俳諧新式今按ゝ夏ゝ農美人草ゝ注農美人草ゝ名ゝ
草ゝ尼の衣ゝ

阿國
李明
夕雨
摺井

草の名多き中に畧之

毛見　中稲　落穂　芥子蒔　小菜　雁　稲負鳥　色鳥　渡り鳥　啄木鳥　鶉

色々の花もちらし佛一秋の名　九声

粟引　粗引

拾ひもの　佛ゆ　為穂うか　故鳳

大根蒔　かぶ菜よく　撮菜　間引菜　中殺大根

尼一人摘まる　人入りり　小菜　畠　越後　桃寒

丁為を澄田　夕日　五百武

古今傳授あり　知らし

いろ色　山路うか　伊勢　山鳥

朝ひし　天窓の　太来

木は　きや　下総　茂蔡

ゆよ色　伏象　梅仙

椋鳥　山雀　四十雀　鶺鴒　連雀　眼白鳥　巣戴鳥　ほほあか　よしと　ひさき　初鮭　さらさら

むら色は　山の　日雀　五十雀　小雀

明は　荏畠　唐鳥　三成　五情

さん雀の　和尚

梢も　押合　故鳳

枯木も　巣ひ　日の　鶺鴒　ほほじろ　ちり　いうろう

さんさう　かく鳥　額鳥　いすう　燕帰る

布川　玉　鯉　水　泥　雲及　冬英

味噌汁　こ　蕨　蘭麻　宇角

かぐら　汐篝　かがりかるく　唱歌　一首
太刀奠　落鮎　下り簗　ひめの魚　ひしこ　鮎宿入
淡鮎　新酒　さし鮒　ヤキ　蠶　ヤきこもる　繰の杭　呉仙
新走　中級　かけ生　好夏　よそ　ものを　竹屋　其角
ものびろく

九月

御灯
不堪月琴
桂宮相撲
泉涌寺舎利會
重陽

九日小袖
後雛
バイ迴

無射律　寒露節　霜降中　紅樹　季秋　菓月
玄月　長月　梢の秋　蘇覺月　小田苅月

三日三月の如く北斗に灯を点ずる夜あり
七日諸国田の損亡ある所を目録にして奉る祖税免給の夜
八日桂の宮八六条の北西洞院の西あり　拾芥抄
八日此會式ありて終日舎利を拜せしめあり　拾芥抄
菓花宴　栗の節句　ねりこめ酒　九日の礼　菓酒
菓飛　菜萸袋　菓のきせ綿　桑くハ　事根源ようり
御湯殿記三日九月節句より二ッ之りと云云
重陽中も雛祭夜侍り源氏物語よハ尋常ある雛遊ハ侍りと
紀夏日九月九日童のやうもを夏あり

醍醐祭　九日　能ゝり　御香宮祭　同日　鞍馬祭　同日
貴船祭　同日　生玉祭　同日
後日の栗　紀寺ハ十日或ハ十日禁裏殘菓の宴ゝり
四の宮祭　十日　下鳥羽祭　同日
例幣　十日伊勢太神宮へ御幣を奉らせ給公卿根源を奏し
御難餅　十二日遵宗ゆそ供之
住吉相撲會　十三日寶の市〳〵もつとり拾ひ物を奏し
宝市　多ゝり社義ゝ〳〵廣芝宝市　春蝶
白川祭　十三日
十三夜　更〳〵〳〵〳〵

撰蟲
雀蛤と成
射祭獣
菊
紅葉
白膠木
かつら
吾亦紅
仙蓼
鶏上戸
南天實
ダモの實

殿上人嵯峨野に遊びて虫籠に虫を入て奉る事あり
月令に是八戌の月に候を記せ飛物化して潜物と成九月の節云云
同書に見へ侍り

桃翁　桃祇
薜江　夫來
古長　和治
其毛

自角
ちくけん
なりの実
桐油實
栗
ミバヒ
無花果
櫟
ちくんの樹
新榧
新ちくり
水木

さんのしまさと風呂　秋のきし　思軽
菩提子　むくろ　椇實　榎の實　とちのこ
とんぎんのこ　椿實　椋實　ぐんぐり
和漢三才圖會曰江戸濃州ちくの油を搾る
義蒙や　秋州の宮に児のこと　桃乎
時珍曰如栗而小き形也
いちくくや　義蒙　極毛　西日うけ　桃從
大和本艸曰櫟を搾て搾とす搾の惣名也
駿州に多く有り
新胡桃　椎實
青松葉を大坂俚語にちくりとす
和漢三才圖會に曰土佐山中に出る

茱萸
佛手柑
雲州橘
蜜柑
まるめろ
漆取
色づき松
山茱萸
うつ柘
薄荷
破芭蕉
芋の穂ひさ

のうつみ〜〜〜

行秋　利秋や芦のうらかぜ秋けはし　薛江
冬近　冬近き埔や尾上の附子売　さ川
冬待　冬待や更ける座の炭　松茶　一斗

冬之部

十月

顓頊帝　玄冥神　應鐘律　立冬　小雪　孟冬
折木　上天　玄英　羽音　律櫨　陽月　良月
小春　時雨月　初霜月　神無月

更衣一日

夏の申装束を撤して冬のよそほひ天皇南殿に出御
節會ありこれを孟冬の旬といふ

神送り　神おくり　酒堂
神の旅　神の藏　其角
神の留守　出雲寺に大社　全
燕糟食　燕糟食　神無月
進炉炭　一日唐おくり荊楚の人食之
一日唐うそ　有司煖炉炭を奏する民家より酒を汲うて煖炉會を

[illegible]

唐土都人墳と詣て饗と[illegible]中も馬車まで陵の朝も寒食[illegible]

炉開　素九

炉の[illegible]きやうの法

紅葉は[illegible]のうんねのとし　其角

射場始　五日

三日と左右衛門弓場の堺をはく天子射場殿と出さるふ

公卿以下束帯めく是を射る

残菊宴

菊花の宴へ九月九日又残菊の宴て十月五日群臣詩を作り酒を多

興福寺法華會

九月三日より七日の間南圓堂と妙法の大會を開うしむ是八十月

維摩會

六日長岡大臣内摩の御忌と[illegible]人

金光羅祭　十日

十日より十六日まて興福寺にて講やとる十六日に大織冠の内忌日也

下元ノ日

讃岐国鵜足郡象頭山

十五日なり

水官解厄

水官主禄百司人間の禍福善悪を聞して天聞まて[illegible]厄を解き

東福寺開山忌

聖一忌とも十七日なり十六日より通天の紅葉見あり洛人

年中行事の終なり

御取越

一向宗私勤めく親鸞忌と修す

遷佛忌

遷ケ品や　俳諧の岸は松　枚露

十夜

茂ももくの小豆煮之十日の夕　静江

芭蕉忌

芭蕉は蕃と[illegible]　桃玉

御影講

柚も梨もれたるよりは[illegible]　治国

東講

[illegible]

芭蕉

折詰文拂

京極器條と鎮座拳世所謂此神八誓文起請赦免の社くうよ

大社神事

出雲国神門郡杵築村より神集十日より十七日まて齋と称

神集　神在

此間と風くしく波荒き日なり龍蛇化度藻と無て海上と

法勝寺大衆會　南禪寺の西北新黒谷の南くせ豆より廿八日まで

茶ノ口切　口切や　鄙とくらす　白のおと　五悅

冬ごもり　ごもれや　枯ゝ残る　猫　花ごの勢　佐夫　桃　五

小春　小春　初霜　消ぬ　初霜や　苔のうきたる　石所　盧長　桃　夷

初時雨　初時雨　旅人と　我名ぬれぬ　袖しほる　芭蕉

時雨　時雨　濡ーする　牛りの　養ある　付函　この南　傘下

霜柱　霜柱　消けぬる　赤土　蜂や　霜ふる　桃李

初雪　初雪や　筆　拾ひ　右ふる　桃翁

初雪見衆　初雪見衆　昔初雪の　降日　群臣　衆内ー　伝ると　初雪の　見衆とや

初氷　解ぬトモ　紙濃の　胡蝶　屏風　氷　木水

冬牡丹　冬牡丹　付西や　ーー　盛ーり　牡丹や　冬　牡丹　一歩

犬莖花　岩山の　冥や　住るの　花さうり　木水

寒菊　寒菊や　寒ーき　廣野は　野の下　全

八ッ手花　鉢一ッ　赤ーり　八ッ手の　乃花の　こゆ　兼之

茶花　茶の花　茶ーー　茶ーーる　輝け　花　桃徒

山茶花　山茶花　花や　日向は　茶の　付も　花　左来

帰花　二輪ーー　咲ーー　木陰や　ーーり　花　五悅

枇杷ノ花　枇杷の　ーー　花咲や　山彦の　鶏鳴り　五晄

水仙　水仙や　ーー　仙や　鶏　糠　接る　菜の　乃ーー　花曉

散紅葉　散ーー　ーーる　洞や　濃ーーる　紅葉　芭蕉

草枯　草枯　木枯や　畠　ーー　辻の　ーー　燕尾

木枯　木枯や　畠ーー　ーーー　ーー　ーー　如豹

鶯の子鳴　鶯の子　ーー　ーー　ーー

霜
雪
雪吹
雪團
氷
氷柱
垂氷
霙
霰
炭
炭竈
榾

溪火よりの朝の霜夜こゝれ　下総国山奴
竹折々音のこゝ陰や夜の白き　野逸
明るゝ雪畑や雪吹の小庭霰　挑水
道埋る榾の薪こゝ雪吹　静江
寂寞はくぐ〳〵芦屋の氷こゝ郷　花隣
明るゝ谷屋根の氷柱こゝれ　挑三
そゝぎの籍の居る枝に垂氷こゝ　挑夢
樫の葉に氷解るみそぎこゝ南　若人
柊は霜ちり重ねこゝ　知道
山里や炭かゝるこゝの八き土　挑祇
炭ゝ焚や雪降る山は霜曇り　紫色
榾の火や宿の主の饗こゝ　冬嶋

巨燵
火桶
湯婆
衾
蒲團
頭巾
足袋
綿子
紙子
冴ル月
鐘こゝる
寒サ

おこゝける宿や藪麻の蒲巨燵　一
刺〳〵その藪麻こゝ　春蝶
薪こゝ〳〵多んぼ冷こゝる月の窪　桃夢
垢ぬゝ世話あき紙のふきまゝ　田太
麻こゝ法や巨燵ふゝんのさあぬも　其角
初老のこゝ〳〵麻るけきんこゝ　土眺
こゝ初る女こゝ袋と撰を寄り　蓼太
獨り居る尼彩毋こゝ紙こゝれ　桃居
脱捨〳〵猫の麻こゝ寒る紙子こゝ　桃女長
宵明の冴こゝ麻こゝ法の主を並こゝ　兼之
待こゝ曇る麻波や今朝の小初巳　遊公翁
古沈こゝる寒こゝ音の寒こゝ　文松亭

麥蒔　麥まきや一戸遠きる西日向　斗賀
蕪　蕪うゑよ苔うゑよ苔ゑよ　石二
大根　舟積の大根ゑ一胡の西　桃蹊
胡蘿蔔　みんちんの葉ハ英くみり畑の源り　花山
蕎麥刈　そはうりや一両ゑ松の下々　桃霞
葱　葱は秀や小西隆る日の影清小西　喜久
切干　きり干や日注の影谷の家　山奴
干菜鉤　仏殿の根ゑも書ゑり絡テ菜　春蝶
枯芦　うれ芦の書ゑの中浦の自　桃祇
枯柳　淋しさやうれ柳ゑ地ゑもる川柳　桃水
枯尾花　中しゑゑ雪ゑ八ほよ一れ尾ゑれ　和溪
枯野　夕日ゑ一の引絡や一れ野ゑ　桃長

木の葉　山川ゑ流ゑて早き木の葉ゑれ　桃蹊
落葉　一ト筋ゑて山ゑ八の落葉ゑ南　桃谷
冬野　寺の裏ゑへ入日や冬野ゑ　風馬
鷹　鷹の引る松や雨のゑれ境　桃暉
鷹狩　鷹ゑる日ゑ入ル系ゑ人の声　五晴
隼　鳶　鵰
鷹匠　追鳥狩
又スクツ鳥　鷹狩ゑ草ゑれ叫ゑ隠ゑる影ゑひそゑる立ゑ
ゑ〳〵叫　ゑゑの影ゑ追ゑゑる示ゑ羽ゑ引て走ゑる
差叫　影の影ゑ追ゑゑも示の草ゑゑ
カゝゝき　たゑれ影ゑゑゑて放ゑゑゑゑゑ叫ゑ
ゑる立墓　影の立ゑゑゑゑ猪人の引ゑゑ

列卒縄　鹿狩は縄を引き〳〵鹿を追出せば追手縄をはるなり
狩杖　犬を引きの〳〵持杖をもつ
ぬくめ鳥　水よ行むかさんなるをぬくめ鳥　文鬼
鴛鴦　鴛二ツ亀〳〵の新かし沈む西　石二
鴨　鴨なる門田や夜ぶの鳥の音　上総　桃支
鷸鴫　掃く袖〳〵寒〳〵鳴もせて鷸鴫　燕尾
水鳥　水鳥や淀り松の右ゑ〳〵　桃賀
浮寝鳥　風多く〳〵浮寝の鳥は夜れ　仝
千鳥　至中のちゝりや成のなれ畠　三世　桃隣
氷魚　遠山〳〵こゝのぬ雪や氷魚　反　松婦
柴積　水中に柴を積魚簗を為れば共て明で是を取なり
網代　枝の露は網代てわたる旭　この南　上総　桃支

タウヘ竹筍　竹を曲〳〵藻の空を羨〳〵奥をるるもの
夜長引　冬の秋山中の獣を探るよ犬を引をり
生海鼠　扇〳〵なる〳〵ふ動り生海鼠　舟　上総　桃支
鱈　寒枯〳〵て果の小舟や鱈一本　桃中
石花　石花〳〵や赤き日の出け潮をこゝ　桃蹊
河豚　胡〳〵は雪高き〳〵〳〵汁　燕尾
鮒　細き灯よ江も〳〵鮒〳〵いさ　舟　桃中
鯨　緑なる浦もせ〳〵やなさ日　翠羽
納豆汁　女房とうゝ〳〵合や納豆　汁　桃徑
蕎麦湯　玄〳〵人を雪の手玄〳〵級をは湯この杯　素丸
綿　町中や秋ぐ〳〵り歩行の音　桃雨
冬籠り　家古〳〵ゑりハ蔵の角ゑりをを　二世　桃隣

冬摂
冬月
冬至
木兎
神迎
冬櫻

落のこり手探うくあけ冬かゝ人　其角
木守りの柿のこりあり冬の月　呉楼
うれきゝゝあ草蘚の陽ろや冬木立　桃雨
木兎は枯木なりの三日月　桃隣
根岸の吹潜めり神むかう　哥爵
今ゝゝよ袖と志ほりや冬さゝ乙　桃翁

十一月

黄鐘律　大雪節　冬至中　仲冬　周正　復月
霜月　霜降月　神楽月　雪見月

暦奏
朔旦ノ冬至
一陽ノ嘉節
添宮線ヲ
印串

中務省より明年の暦を奏る
十一月一日より冬至かのそらの日まで十年は月豊年あり
十月は陰盛り冬至より一陽来復あり
唐の宮中かの糸筋とりて日陰を量る冬至の後より
日ゝゝゝ長ず一線を添ずそ
唐ふ印串として七十二節を刻て其長短を分つ所謂一年
七十二候あり

勵復機ヲ
赤豆ノ粥

唐ゆゝゝ人の娶ける者男姑よクツシトウツヲ奉ル
共工氏ノ子冬至を失セしが疫鬼となり赤ほづきを恐る

ゆへに是をもらす

上卯日神主おのゝ官幣をもつて行ふ近き比絶て沙汰なし

築紫胸形ノ社の祭あり上卯

上巳日　平野祭　上申日　春日祭　十四日

十四日　當麻祭　同日　卒川祭　上酉日

上卯日　當宗祭　同日　中山祭　同日

同日　大原野祭　中子日　園韓神祭　中丑日

中申日　日吉祭　同日

右神社祭年ゟ両度なるゆへ季を定むべ

五節帳臺試　五節の舞ハ五人あり常寧殿ゟ天子御覽あり

五節ハ中丑日　帳臺試ハ寅　御前試も同く江次第ゟあり

殿上淵酔　中寅日朗詠今様御ごらんして三献ハテ乱舞あり公事根源ゟ

狩使

童女御覽卯日　清涼殿ゟめ〳〵出浴ゟ

鎮魂祭中寅日　此祭ハ人の魂の離れをとゝ招き身中ゟ活ル功能なり

新嘗會　中卯日これハ今年の初稲を神ゟ受ゟ義あり大嘗會ハ

御代の始ゟ一度あり

豐明ノ節　中辰日新稲を神ゟ給ひ君もまたこれを臣へも給ふなり

日吉ノ臨時祭　中申日建暦三年十月十日ゟ始る公事根源ゟ委

加茂臨時祭　下酉日北祭是あり先兼日に試樂あり公事根源ゟ

東三條御神樂　下卯日拾芥抄ゟ

小忌衣　山ゐの袖　舞人の衣裳なり

日蔭ノ蔦　神のこゝろ〳〵なり彩裳會の時からゟあり

日蔭ノ糸　草のかげ〳〵よかくりて糸ゆく鬢袖よかくるあり
神樂哥　大嘗會の時近江のサカ田郡より翁の參りて稲を舂
神楽哥　その付甘奇を謠あり
阿知女　日本記梁塵秘抄等よりくくり
庭燎　神樂の曲は名あり
採物哥　サカキ　ミテグラ　杖　笹　弓　太刀　鉾　ヒサコ　斤　折
韓神謠　諸拳　葛　いづるもよ取物あれ入りこの歌とうたふ
大前張　梁塵愚按抄よりカラカミ〳〵宮内省よりほうん韓神二座を侍ら
小前張　宮人　ユウミテ　十二カタ　サイハリ　ミヤガトリ　井奈野　ワキモコ
　　コモ枕　ミヅヤイソラ　サヽナミウヘツキ　総角　大宮　ミヤト田
　　キリ〳〵スこゑらも皆こゑひとつあり
千歳早歌星　キヽリヽ　トクセニコ　ユウツクル　ヒルメ　弓立　アサクラ　つゝ駒

御火焼　酒殿哥　右神樂ウタ皆季をこゝつあり
新玉津嶋御火焼十三首五條の南鳥丸の西衣通姫を和哥を守らせの神も
吹革祭　〈ツイトノウタ　おほ〳〵とものや松はたけうりは山と咲　浮生
冬至　そゝ〳〵風ふる吹革ふる　この邦　素九
子祭　嘗は素〳〵　聲あるゝ　ゆうゆ　翠羽
三嶋ノ酉市　子祭りや　斤　赤よりれ葉の七大根　遠反　桃處
里神樂　稲解〳〵　ぬるこみもや雨の市　桃一
瀬見世　本の葉　焚く　釜のあきりや里祢宋　玉緒酒　山奴
髪置　この人世や　垣吹　武人　けれ　桃栄
袴着　髪ふるや　脊渡の　れ　若衣初め　新石
被初　袴ふるや　我ふよ腰のありそしめ　繁反　桃戸
　　紅葉ふ〳〵　第五いりとて被初　桃條

道祖神祭　十六日摂津天王寺領より
空也忌　十三日りかより四十八夜迄〳〵暁〳〵よつゝ伝る
錄のゝ〳〵き　孫乞〳〵八竹と成るわや迄〳〵き　素堂
報恩講　油火よりゝ〳〵き　明〳〵や報恩　忌　桃種
大師講　何のゆゑかのあれりふハ大師講　如斯
御祭　廿七日南都春日の神事あり是とは春といつけきり
後日能　春日の祭翌廿八日猿楽なるとゝ
掛鳥　春日の祭は時贄鳥戰ことゝ春きるゝ
宇賀祭　九條東洞院より主五穀神
山神祭　社の辺は樹上る幣を切りけ神人を使く燎火と焼いとり
暦うり　暦うり迄や葉のかき　柳の春　桃雨
冬至梅　冬ふゝて春あり加減や〳〵〳〵梅　新右

雪ごか　舞さゝく〳〵　源町や春とうー　桃祇
雪車　牛一ッ雪車の跡り山路うゝ　桃榮
雪沓　はるかゝきの残りうちのつ　桃賀
橇　かんゝきをゝきゝ湯より猿蓑式　桃夢
初深雪　宮ぜんゝ矢竹ゝ　静江
雪ちるき　雨傘日ちるきハ時雨ゝ風の深ちるゝ云春の深ちるゝ春
ちるきやゝ又通俗忘ル雪の深ゝゝ日積りゝ春ゝ風の雨り
ゝ次ゝゝ
羅山子曰銀竹ハ雨ゝ氷ゝと雨と表現ゝり
銀竹
雪垣　雪竹　雪礫　雪ゝ佛　雪ゝ部　暑ス
薄氷　厚氷　氷の声　氷花　氷衣　氷面鏡
霰酒　霰地錦　霰釜　ゝゝ

菜喰　雪仙堂
鰤　桃一
杜父魚
寒苦鳥

乳のもゝ月をかこちり菜喰
鰤有るく弧の動き濱の舍り式
霞のゝ月附出る美動り秋唱河原く同類
此鳥夜の寒さをうゝみ夜明ゝ動び巣を作らんとおくなり
日本中華ゝも動き多動り佛經ニ出ッ

凍
室咲梅　桃雨
太山榕　桃從
新生姜　桃賀
新于蕪　桃祇
大夢

凍上る門や祈る山牛房
爰くうり白ゝ菴や宮のむ矣
文字出んみやまおきゝの巣は形
雨寒ータ暮ゝ振る野ゝ姜
ゝゝもきゝで茎干ゝ濱や行ゝ蕪

十二月

大呂律　小寒節　大寒中　季冬　臘月　涂月　凋年
急景　窮月　窮月　霜曉　春待月　梅初月

乙子朝日
忌日御飯
大神祭
天智天皇御国忌三日近江の國崇福寺ニて行ル
御體御卜奏　十日六月もゝり明年六月までのゝを占て其方の神ゝ奏ス
ゝゝゝ祈中へきゝゝ奏ス
月次祭　神今食　十日六月ゝ行ル
臘八　腸をさゝゝゝゝゝ　池　良　汀　許六
中仏名　おゝゝゝゝゝ佛　忘　太来

かつけ物
栢梨ノ勧盃
御髪上
幸童像ヲ立
荷前使
著駄政
内侍所御神楽
最勝寺灌頂
大徳寺開山忌
齋宮ノ繪馬
和布刈ノ神事
追儺

佛名の導師より賜ふ物
律の国かやぶ一の庄はみきと奉る仏名の一きあり
下の午日美人御髪ニ初アリを賜りて焼ゆ物
大寒より日夜半ハ陰陽師土牛ヲ里子の像を四方の門ハ立中央ハ立
十三日此使立春ハ大神祭の後立春ハ前ヲ吉日と撰よし
五月ヲ同ジ
天子内侍所ハ行幸ハリ御拝ハリ刀自祝詞あくヤ物
保安三年十二月十五日於當寺始て行る
開山真禅大燈国師の號を賜建武二年十二月廿三日迄
伊勢齋宮の樹下道のかさわらハ祠ハリ晦日夜里人繪馬を掛る
そもそもよ和布刈ハ神の火乃光　桃雪
追ふらんや服ふくへるこ鬼の面　荷兮

簑和田ノ鯉取
八月鱈取
大原雑喉窪
囲見
年終魂祭
星佛賣

寒梅
孟宗竹
臘日　大蜡
貘枕同札

この月ごハ常陸鯉の名所あり
北国の川沢ハ多くハリ
昔節分の夜男女あり通夜ハ
枝ハ花ハ見ハ鳥ハ郡　柳門
報恩経ハ十二月晦日の午時ハ来りて正月一日卯時ハ
人々明年ハ星を祭る人星の名義守護ハ不動大日等の
佛名を書て賣ハ
寒中ハ春へハ竹の子出る大きさハ八尺余ハ
嘉平清祀　説文曰冬至後三戌為臘燭實典曰臘者祭先祖蜡者
百神同日異祭也風俗通曰夏曰清祀殷曰嘉平周曰大蜡漢曰臘
節分の夜ハ〜〜云獏の形を画て枕ハ悪き夢を見ぬ

煤掃　ほうきや山風うけて吹通し　文艸
こたつ鮒　鯛味噌　鹿賣　豆腐　蒟蒻　氷　寒晒　寒造
寒聲　こゑ声やみなとを入しり橋の上　素九
寒垢離　寒ごりやゆ氷ゆる裾あもと　桃夢
寒念佛　堤より我かけ声寒念仏　桃戸
年忘　咲梅の日向よ年とるもれり　桃隣
年籠り　年とりの世ハさわ〳〵の新き　梅人
古暦　今ハしき胡麻豆腐や古暦　桃鏡
暦景　同巻納　札納　門松ノ營
米洗　道〳〵出〳〵氷ゆる水ゆり米洗ひ　桃李
餅搗　有明も二十日よ近し餅の音　そも我
餅花　そもゝ色よ折〳〵門うれ　若雨

節分　花ゝうれ竟や梅ゆ　御居
上條天神談　勝の餅おけらを求るゆり
柊賣　降〳〵ふる雪まゝきり松うり　伊勢　桃戸
柊さし　淮の素〳〵柊さし〳〵草の庵　民玉
宝船　刈ゝ〳〵布袋ハ寒し家ゆ　超波
吉田大祓
除夜　節分火炉ゝ火焼ゆり
分歳　大年　除年　晩年　宇年　いゆる年　年終　歳末　一ト志きり　帰〳〵ゆ〳〵除夜の雞　利合
行年　りゆゆや素屠の歳日　記　完來
歳暮　月ゆゆ〳〵年ゆ〳〵れ蕪　下絲　茂蘭
師走　朔の宿〳〵貝剥く濱の所也　二世　桃雨
大晦日　大晦日ゆ松つむ老の巨燵　素九

年浪　年ごとの波や酒盃のかいさつね　梅年
年ノ漆　数の帆は霞むや年は大漆　下総　山奴
年ノ岸　入漆まる船の帆ハ一ちの岸　桃祇
年の名残　風呂さきそめ方よしむ年は名残哉　文來
年ノ果　よしなしの小野やちの庵り馬　静江
春近き　夫らこうき育味身や猫の声　三世　桃隣
春を待　夫移ん伏見の翁ゑりの口ゑり　徳布
厄塚立ル
厄祓　厄落
鶯始メテ巣ヲクム
衣配
節季候

節分ノ夜吉田神祇官ニ行フ
泥棒ん〻〻声あり夜まの尼拂　燕尾
雞ヲ忌ミス
松賣りと乗道之門トや衣ゑゑ望　頂松
節季はやの弱りて湯ゑ出への中　尚白

年木樵　松ゆ流き道ふみ行よこ年木樵　二世　桃隣
年の市　股ゑ〻童あり寄ゑ年の市　大夢
年内立春　年のうちる幸ゑ猶ゑ寄り　柳居

冬之部終

松鶴軒蠡丸
龜龍軒士壽丸

跋

識者家藏家宝名此清々用如
[illegible]の如 [illegible]も [illegible] 四時乃
[illegible]知 [illegible]句 [illegible]
[illegible]句 [illegible]
[illegible]清 [illegible]時 [illegible]
其 [illegible]知 [illegible]事 [illegible]
[illegible]川 [illegible]山三也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白堂 秋雨

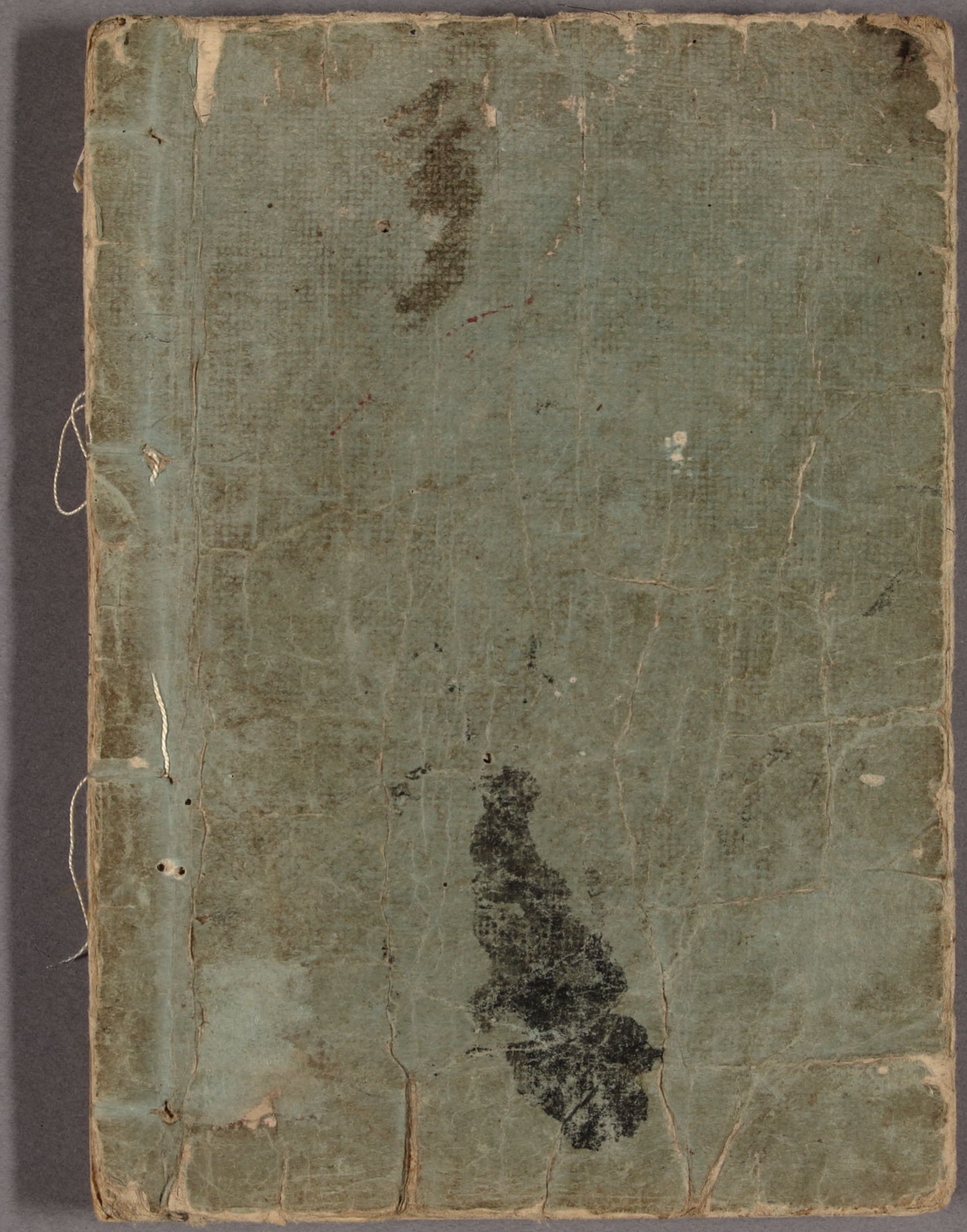
松旭舎静江 校合

北総油田

山奴著

太白堂藏

寛政十一巳未年初春

江戸大傳馬町二丁目 大和田安兵衛

同麹町十丁目 角丸屋甚助 開板